

ハイスクールD×D　～
モンスターなハンター
と過負荷の物語～

深道兎心

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神のミスで死んでしまった主人公達：特典を貰い転生する物語が今、始まる。

タグに入りきらなかったワード

他作品からもキャラ参加あり

目次

プロローグ〜転生する主人公達〜	1
原作開始前〜二天龍VS爆炎を纏いし裁定者&悪平等な人外〜	8
キャラ設定	14
伝説の始まり	19
原作開始	30
原作介入	41
渚、シスターと出会う	57
ライザーフェニックス現る	76
はぐれ悪魔：黒歌の真実	102
レーティングゲーム開始〜伝説の英雄現る	

伝説の英雄と生徒会	106
使い魔編	145

プロローグ　転生する主人公達

プロローグ

??? 「……此処は何処?。」

そう呟き一人の少年が身を起こす、辺り一面は真つ白な空間だ。

??? 「……知らない天井だ。」

後ろで聞き覚えのある声が聞こえたので声のする方に顔をむける。

??? 「なんでナギが、此処に居るの?。」

ナギと呼ばれた少年「そんな俺が知りたいわクロ。」

クロと呼ばれた少年「ですよー。」

??? 「其れについては、ぼくの方から説明しよう。」

突然響く声何故かその声は少年にも聞こえるし、少女にも聞こえるそんな不思議な声だった。

クロと呼ばれた少年「だっ誰だ!?! (何処にも人影は、見えないのに!?!?)」

ナギと呼ばれた少年「そっそっさ、姿を見せろ(声からしてシヨタか幼女だろ。)」

??? 「こっちだよこっち。」

二人は声の聞こえた方向を向く、二人の前に居るのはどう見ても小学一年生の女の子だった。

クロと呼ばれた少年「小学生の女の子……（あり得ないこんな小さい子がこんな真つ白な空間に、一人でいるなんて?!?。）」

ナギと呼ばれた少年「マジで幼女だった（なっなんか嫌ーな予感が……。）」

神様「中々察しの良いのがあるね、さて先ずは自己紹介から僕は神様って奴かな。」
突然そんな事を言ってくる女の子に混乱する二人。

クロと呼ばれた少年「……（どうゆう事、仮にあの子を神様としようだが何故僕達の前に居るの?。）」

ナギと呼ばれた少年「……（ヤバイマジでヤバイだろこれ俺達もしかして……。）」

神様「結月渚くん君は中々察しが良いよ、其れに比べたら石神骸ちゃんと来たら。」
渚「なっなんで俺達の名前を知ってんだよ?!?。」

骸「僕は男だ!!!。」

神様「……マジで?。」

骸「本当の事だよ僕は、生まれた時から男の子だ!!!。」

神様「成る程おとこの娘か。」

石神骸は、よく女の子と間違えられているがそれも仕方ない彼は、めだかボックスの球磨川禊をもう少し女顔にした感じの見た目をしている。結月渚は、鉄血のオルフェンズの三日月とほぼそっくりだ、違う所は左目に傷があるのと何故か身長だけはオルガと同じ高さの二つだけである。

神様「容姿の問題は置いて、本題に入らせてもらおうよ。」

渚「クロも落ち着け。」

クロ「分かったよ……。」

神様「さてと、君達二人は死んでしまったのさ。」

骸「……うう嘘……でしょそんなのあるわけ無い。」

渚「やっぱりか……マジかよこんななん信じられねえけど。」

骸「ナギは信じるの!??こんな巫山戯た話を、僕は信じられないよ!??。」

渚「俺だつて信じたくはないけど、クロは此処に来る前の事覚えてるか?。」

骸「そ……そんなの当たり前だよ、えつと……何も覚えてない……じゃあ、ナギは覚えてるんだよね!??。」

渚「悪いがサツパリ分からん、だから神様そこんとこ詳しく教えて貰おうか?。」

神様「分かったよ、話すよ君達は下校中にバスに引かれたんだ……しかもこの事故での負傷者と死傷者は君達だけだ。」

死んだその事実を、教えられて何故か分からないが納得している自分がいる事に戸惑う二人。

骸「分かりました、事実を教えてくださいありがとうございます。」「

渚「大丈夫か？クロ。」

骸「ありがとうねナギ、あんまり大丈夫じゃないけどね。」

神様「だが問題はそこじゃあない。」

渚「本来なら俺達は死ぬ運命じゃなかった事だよな？。」

神様「そうだ君達は死ぬ運命じゃなかった。」

骸「ナギは何で僕達の運命なんて知ってるの？。」

渚「簡単な事だ俺達に通ってた学校で、今回みたいにな内容の物語が流行っただろ？。」

骸「そういえばそうだったね」

神様「知ってるなら話は早い、君達には転生して貰うよ。」

渚「どの世界に転生するんだ？。」

神様「ハイスクールD×Dの世界だ」

骸「確か主人公が手遅れなレベルで変態なんだっけ？。」

渚「何でクロはそんなに覚えてんだよ。」

骸「別に良いじゃんか。」

神様「大体合ってるから大丈夫だよ。」

渚「特典とか貰えるのか?。」

神様「好きなだけ選んで良いよ。」

骸「本当に良いの?。」

神様「君達の死は僕のミスだからね。」

渚「なら……モンハンのモンスターを神器化してくれ後、デイケイドドライバーに
デイエンドドライバーのライダー召喚能力くっ付けてくれ。」

神様「其れだけで良いのかい?。」

骸「僕はめだかボックスの過負荷全てとfateの英雄達の力が使える神器をください
い!。」

神様「骸ちゃんは容赦無いね。」

骸「だから僕は男だ!!。」

渚「クロがチート化するなら俺だつて………よし、さっきの奴とプラスで俺が考えた
オリジナルMSエクシアダークマターMarkIIの神器化と左目の傷を隠す為の眼
帯と、これゾンのユーを妹にするのとオルガを教師にしてくれ。」

神様「ブルータスお前もか?!?。」

骸「あつ……じゃあ fate の衛宮士郎を幼馴染みで後は、デビルメイクライのバールをお父さんにして下さい！」

神様「分かったよなら僕からのプレゼントだ、君達の好きなキャラクター達を転生させとくよ。」

渚「太っ腹だな神様。」

骸「やったー！」

神様「さてこれでやるべき事は全て終わった、此れから君達に転生して貰う。」

渚「なー神様。」

神様「どうしたのかな?。」

渚「チョット確認したい事があるんだが?。(まさか……あの方法で転生させないよな?。)」

神様「その通りだよ、渚くん。」

骸「?……どうゆうこと?。」

神様「こうゆう事だよ骸ちゃん。」

渚「マジでやりがったなあー

ー。」

骸「何で床がないのオーー。」

こうして新たな物語が始まろうとしている。

原作開始前～二天龍VS爆炎を纏いし裁定者&悪平等な人外～

前回のあらすじ

神様のミスで死んでしまった、主人公の渚と骸は特典を貰いハイスクールD×Dの世界に転生した。

渚「巫山戯んじやあねえー。」

骸「何でこうなるのおー!?!?。」

徐々に近づく地面、二人は地面に叩きつけられる事を覚悟した時、渚だけ地面に叩きつけられる。

渚「ガッ!?!?。」

骸「なっナギ!?!?。」

渚「俺は大丈夫だクロの方こそ大丈夫か?。」

骸「何でか分からないけど大丈夫だよ。」

??? 「大丈夫ですか? マスター。」

骸 「何処から声が……聞き覚えのある声だよこの声。」

渚 「俺にはお前の体から聞こえたんだか?。」

神様 「「あーあー聞こえるかい?。」」

渚 「聴こえてるぜ神様よ。」

骸 「聴こえてるけど、どうやって?。」

神様 「「君達の頭の中に直接語りかけてるよ。」」

神様 「早速本題に入ろうか、実は間違えて原作前つまり大戦時代に飛ばしてしまったんだ。」

渚・骸 「「えっ!??。」」

突然の事態に固まる二人、ゆっくりと周りを確認する二人。

辺り一面木だらけで今居る場所が森だと分かる二人、視線を上に向けると其処に映る

景色は青い空では無く、紫色した空だった。

渚 「この時代から生きてくのか……無理だろ。」

骸 「何この空見たこともないよ!。」

??? 「此処は冥界と呼ばれていますよマスター。」

骸 「この声は誰のなの?。」

神様 「「その声は骸ちゃん神器に宿る英霊の声だよ。」」

渚「マジかよ……。」

アルトリア「自己紹介させていただきます、私はアルトリア・ペンドラゴンです、かつてアーサー王や常勝の王と呼ばれてました。」

骸「よ……よろしくねアルトリア。」

神様「「ちなみにアーサー王以外にも英霊は宿っているから。」

渚「良かったなクロ、憧れの英雄と一緒に闘えるぞ。」

???「其れは、お前もだ」

渚「なっ……俺の中から声が……?。」

神様「「渚くんにはモンスターに自我を、与えてみたよ。」

ゴア・マガラ「そうゆう事だ、俺も自己紹介しておこう……俺はゴア・マガラだ黒蝕竜とも呼ばれている。」

渚「ゴア・マガラよろしくな。」

ゴア・マガラ「分かっている」

神様「「渚くん骸ちゃん、ちゃんとした時代に飛ばすから少しだけ時間を貰うね。」

骸「待ってる間は、何してれば良いの?。」

神様「「好き勝手やっていいよ。」

渚「好き勝手って無茶苦茶だろ……おい神様……勝手に消えやがって。」

渚「何だ気になるのかゴア・マガラ?。」

ゴア・マガラ「当たり前だ俺とて龍だ、他の龍の事は気になる。」

渚「ドライグは10秒毎に自身の力を二倍にする、アルビオンは10秒毎にありとあらゆる物を半減させる。」

アルトリア「しかもドライグとアルビオンは神さえ屠れると言われています。」

ゴア・マガラ・骸「何だその程度か(何だ)。」

渚「ゴア・マガラは理解出来るがクロは、如何してだ?。」

アルトリア「そうですねマスター、幾ら英霊が強いえどあの二体相手は難しいでしょう。」

骸「確かに英霊だけだったら難しいけどね。」

ゴア・マガラ「如何にして戦うつもりだ?」

骸「『大嘘憑き』を使うだけだよ。」

アルトリア「マスターその『大嘘憑き』?とは何ですか?。」

骸「現実を虚構にする能力だよ。」

アルトリア「っ!!!」

ゴア・マガラ「弱点はあるのだろうか?。」

骸「勿論ちゃんとあるよ、『大嘘憑き』で無かった事にした物は無かった事にならない

つまり、取り返しの付かない能力なんだ。」

アルトリア「それでも強すぎです。」

渚「改めて聞くとヤバイなそれ。」

ゴア・マガラ「戦いたく無いなそんな能力を、持つ奴とは。」

骸「えへへへ／＼／＼。」

アルトリア「……（マスターが可愛い過ぎる／＼／＼）」

渚「クロまた女子っぽいぞ。」

骸「やってしまった……。」

渚「クロ二天龍はどうする?。」

骸「そんなの決まってるよナギ。」

渚・骸「二天龍をブチのめす!!。」

渚と骸は自分たちのすべき事を、宣言した、この時二人は此れが冥界に語り継がれる伝説になるのは、予想しなかつただろう。

キャラ設定

オリ主1

名前 結月 渚 ゆづき なぎさ

年齢 17歳

性別 男

種族 人間（ハンター）

性格 家族思いで優しい、困っている人がいるとついつい助けてしまうお人好し。

夢や理想を大切に行っている為、夢や理想を侮辱する奴を嫌う。

ユーのことになるとブラコンになり

メイド服などを着たユーを見ると

鼻血を出す。

左目に傷がある為異性にモテないと思っている。

見た目 鉄血のオルフェンズ三日月に良く似ている、違う所は、背が鉄血のオルフェンズのオルガと同じで左目に傷がある位、傷は眼帯で隠している。

神器 怪物の狩人「モンスターハンター」モンハンの武器や防具、モンスター達の力を

使える、モンスター達は自由に神器から出られる。

禁手 モンスター達と融合し半獣化。

覇龍 完全にモンスターと成り暴走し続ける、暴走中は命を削る。

神器2 破壊者の神帯 【ダイケイドドライブ】ライダーやサブライダー達に変身や召喚出来る。

禁手 闇ライダー達に変身出来る。

神器 エクシアダークマターMarkII【黒き蒼天使】エクシアの四倍のスペックの性能があり、システムにTRANS-AM NT-D EXAMを搭載している。

武装 プロミネンスGNソード(右手)、アイクシクルGNソード(左手)、GNハンドガン×2、GNバスターソード×2。

オリ主2

名前 石神 骸 いしがみ むくろ

年齢 17歳

性別 男(おとこの娘)

種族 人間

性格 渚と同じく家族思い、女子に間違われるのを嫌うが天然な為、偶に女子っぽい仕草をしてしまう。

神話が好きで神様や英雄に憧れている。

見た目 fate のアルトリアに良く似ている、違う所は髪が黒で目も黒、髪は肩まで伸びてる。

神器 英霊達の主人 [「サーヴァントマスター」英霊達の宝具やスキルを使える、英霊達は神器と外を自由に行き来出来る。]

禁手 fate / kaleid liner プリズム☆イリヤのインスールの様に英霊達に一時的になれる。

過負荷 マイナス

『大嘘憑き』 『オールフィクション』 因果律に干渉し、現実(すべて)を虚構(なかったこと)にするスキル。虚構(なかったこと)にしたものは虚構(なかったこと)に出来ない取り返しの付かないスキル。

『劣化大嘘憑き』 『マイナスオールフィクション』 強い心のこもった行動や心に深く残った記憶などは、虚構(なかったこと)にできなくなっているスキル。

『安心大嘘憑き』 『エイプリルフィクション』 虚構(なかったこと)にした対象が三分で元に戻るスキル。

『虚数大嘘憑き』 『ノンフィクション』 虚構(なかったこと)にしたものを虚構(なかったこと)にできる取り返しがつくスキル。

『却本作り』『ブックメーカー』螺子で貫いた相手の肉体、精神、技術、頭脳、才能の全てのレベルを球磨川禊と同じ弱さにまで引き下げる。この性能から強さ（プラス）を弱さ（マイナス）にするスキル。あくまで心を折るスキルであり、「他人をマイナスにする螺子」というイメージを周囲に押し付けているだけである為、螺子で貫かれても肉体へのダメージは無い。球磨川禊と同じレベルまで下げられるという特性上、封印としても用いることが可能。対象を絶対的に弱くするのではなく、あくまで「球磨川禊と同じレベルに引き下げる」という能力の性質上、球磨川禊が幸せになればなるほどその効力は弱まるがこの作品では関係無い。このスキルを受けた者は、髪の毛が白髪になる。

『不慮の事故』『エンカウンター』自分が受けるダメージを他人に押し付けるスキル。肉体的ダメージのみならず、トラウマやストレスなどの心理的ダメージまでも押し付けることができる。

『致死武器』『スカーデット』古傷を開くスキルで、周囲の人間の怪我、疾患などの完治済みの古傷を強制的に生傷に変えて再発させることが出来るスキル。虫歯な筋肉痛などの日常的な傷や、トラウマにも効果を及ぼす。本来は生物にしか作用しないが、能力の箍を外すことでコントロール不能になる代わり、建物などの無生物にも作用する『憎武器』『バズーカー・デット』を発動出来る。この場合、施工や補修すら古傷とみなすことができるため、建築物はあっという間に倒壊する。

『荒廃した廃花』『ラフラフレシア』手に触れた物を生物、無生物、気体問わず全て腐らせてしまうスキル。土を腐らせて培養土を作り植物を操るなど、様々な応用が可能。

『正喰者』『リアルイーター』スキルを食い改めるスキル。他人の特技を属性や過程を無視して違うものへと書き換え・作り直してさまうスキル。即ち、その人間の才能や個性を台無しにする、何よりも過負荷らしいスキル。

『凍る火柱』『アイスファイア』

自身の体温を操るスキル。体温を上げて氷を作り出したり、体温を上げて火柱を発生させたりできる。

前回の訂正すべき部分を指摘されました。アルトリアではなくアルトリアでした誠に申し訳ありません。f e t aのサーヴァントは未だ誰を登場させるか決まっています、どうか今後ともハイスクールD×Dくモンスターなハンターと過負荷の物語くをよろしく願います。

伝説の始まり

前回のあらすじ

ハイスクールD×Dの世界に転生できた主人公の渚と骸の二人、しかし神様のミスで大戦時代に来てしまった二人は二天龍を倒す事にした。

渚「さて……二天龍を倒すのはいいとして、どうやって姿を変えるか?。」

骸「何で姿を変える必要があるのナギ?。」

渚「神様が言ってたろちゃんとした時代に飛ばすと。」

骸「言ってた様な言ってたなかった様な……忘れた!。」

渚「言ってたんだよ!でだ姿を変えないと多分厄介事に巻き込まれる。」

骸「成る程どうしよう?。」

ゴア・マガラ「渚よ前は鎧を着ればよからう。」

渚「成る程その手があったか……だがクロはどうする?。」

アルトリア「では私の様に魔力で鎧を編むのはどうでしょう?。」

骸「良しその方法でやってみるよ、ありがとアルトリア。」

渚「ならどんな鎧にするか決めるとするか?。」

骸「そうだね。」

??? 「なら儂の鎧を使え小僧。」

渚「今度は誰だよ?。」

アカムトルム「儂の名前はアカムトルムじや覇龍とも呼ばれておったのお。」

渚「分かったよアカム爺。」

アカム爺（これからアカム爺と書きます）「此方こそよろしくのお小僧。」

骸「僕もどんなのにするか決まったよ。」

渚「早速着るか。」

骸「そうだね。」

渚「先ずは俺から……行くぞアカム爺。」

アカム爺「了解じゃ。」

ガシャン ガチャガチャ

そんな音と共に渚が鎧に包まれる、その鎧は黒色を基調とし橙色のラインがあり全体的に刺々しい鎧だ。背中には凄まじい存在感を出す太刀があった。

渚「スゲエ鎧と武器だな……。」

アカム爺「当たり前じゃよ小僧、儂は古龍とも戦えたのじゃからな。」

骸「凄いねナギ、所で背中にある太刀はどんな名前なのアカム爺?。」

アルトリア「そうですねマスター私も気になります。」

アカム爺「この太刀は覇帝刀エムカムトルムと呼ぶのじゃよ。」

渚「俺の鎧の事は後でだ、次はクロの番だぞ。」

骸「そうだったね…アルトリアどうやって魔力で鎧を編めばいいの?。」

アルトリア「そうですね…イメージでしょうか?。」

骸「イメージ?。」

アルトリア「そうですねマスターの思う最強の人をイメージすればいいと思います。」

骸「アルトリア…分かったやってみるね。」

骸がそう言った次の瞬間凄まじい魔力が骸から放出された、放出された魔力は徐々に形を形成していく、段々と魔力が弱まって行くに連れ骸の服装が変わっていく。

肩まである髪を後ろで結び頭に赤色の帯を巻き服装は俗に言う巫女服であった。

アカム爺「…此れから小娘と呼んだ方がよい気がしてきたのお。」

アルトリア「…マスターその服装は…(私よりも可愛い／＼)。」

渚「…何でそうなるクロ。」

骸「しつ仕方ないじゃないか最強って言われたらどうしても安心院さんが出て来ちゃうの!!。」

アルトリア「マスターその安心院さんってどんな人なんですか?。」

アカム爺「おおお其れは儂も気になるのお。」

骸「安心院さんはものすごく強いよ、だつて僕でさえスキルは10個なのに安心院さんは一京2858兆0519億6763万3865個のスキルを持つ人外だからね。」

アルトリア アカム爺「「っ？？」」

アルトリア「一京ですか……。」

アカム爺「そんな奴と儂戦いたくないのお。」

渚「やっぱ安心院さんには勝てる気がしないわ。」

骸「そんな事より早く二天龍を如何にかし無いと。」

渚「そうだったな……だがどうやって場所の特定をするかが問題だ。」

アルトリア「それなら私がやります。」

骸「アルトリアあってドライブの位置が分かるの?。」

アルトリア「私の魔力はドライブと酷似しているので、場所の特定は簡単です。」

アカム爺「だが其れは向こうも同じじゃぞ。」

アルトリア「それは分かっています。」

渚「それでも良いからやってくれ。」

アルトリア「分かりました……此処から五時の方向で距離は約30キロくらいです。」

骸「ありがとうアルトリア、大好き！」

アルトリア「っ!? あっありがとうございます／＼。」

アカム爺「小僧よアレは狙ってやておるのか?。」

渚「いやあれは素でやってるしクロの奴絶対気付いてない。」

アカム爺「さようか。」

骸「ナギ早く行こう!。」

渚「行くか準備はいいかアカム爺?。」

アカム爺「愚問じやぞ小僧。」

骸「ナギ早く行こうよ。」

渚「行くか!。」

三大勢力サイド

此処では悪魔 墮天使 天使の三大勢力による大戦があつた、何故過去形なのか
 と言うと二天龍が大戦に乱入し大戦どころじやなくなっているからだ。

「くそっ! 二天龍相手にどうすれば?。」

「サーゼクス!! 考えるのは後にしろ出なけりや死ぬぞ!?。」

サーゼクス「分かつてるさそんな事! アザゼル君だつて無駄口叩く暇があつたら二天

龍を如何にかしてくれ！」

アザゼル「んな無茶な事言ってる場合か！くそつミカエル何でもいい！なんか作戦は無いか！」

ミカエル「作戦なんて練る時間がある訳ないじゃ無いですか！」

サーゼクス「どうする？！このままだと三大勢力全員全滅だぞ！」

ドライグ「我等の誇り高き闘争を邪魔する雑魚供が！」

アルビオン「赤いの、珍しく意見があつたな。」

ドライグ「そうであろう、白いの。」

ドライグ「白いの此処は闘争の前に、力の差が測れない雑魚供を先に蹴散らすとしよう。」

アルビオン「そうだな、赤いの」

ドライグ アルビオン「我等の闘争を、邪魔した事を後悔するがいい!!」

渚「ならば、ハンターである俺に見つかった事を後悔するといい。」

サーゼクス「なっ?!? かつ彼は何を言ってるんだ!!。」

アザゼル「あいつ馬鹿だろ何で二天龍に挑発してんだ?!?。」

ミカエル「残念ですがもう助かりませんね。」

ドライグ「人間……今何と言った。」

アルビオン「返答次第では見逃してやる。」

渚「ふむ……聞こえてなかったのかならばもう一度……ハンターである俺に見つかった事を後悔するといい、と言ったのだよ古龍にも劣る蜥蜴。」

ドライグ「人間風情が調子に乗りおつて……今すぐ俺の炎で焼き殺してやる!!!」

ドライグの口から炎が放出されその炎は、渚にあたる筈だった。

バーーン ハッ

渚以外の全員「「「「なっ!??。「」」」」

ドライグ「きつ貴様何をした!」

骸「全く人の事を置いて一人で突っ走るのは、君の悪い癖だぜ?」

渚「ふむ……済まない。」

ドライグ「小娘何をした……!!」

なっ何故だ何故、小娘からアルトリアの魔力が感じられる! 答えろ小娘!」

サーゼクス「アルトリア? 誰だ……だがそれより彼女は誰だ? (可愛い／＼)。」

アザゼル「どうやって赤龍帝の炎を消したんだ (綺麗だ／＼)。」

ミカエル「……美しい。」

サーゼクス アザゼル「「おい! ミカエル!??。」」

骸「そんなの簡単な事だぜドライグ、アルトリア本人に君達を止めて来てくれって頼

まれたからだね。」

ドライグ「アルトリアが……。」

渚「だからさっさと狩らせろ。」

骸「君は何処でもそれだね……。」

アルビオン「それがどうした我等には関係無い事ださっさと死ね人間供が！」

アルビオンは痺れを切らして骸に尻尾を叩きつけるがそれよりも先に、アルビオンに馬鹿でかい螺子が数本身体を貫く。

アルビオン「ばっ馬鹿なあり得んこん……な……と……。」

ドライグ「白いの！小娘、白いのに何をした！其れと先程の俺の炎もどうやって消した！」

骸「簡単だよ炎は『大嘘憑き』でただ虚構にしただけさで、アルビオンには『却本作り』で封印しただけさ。」

ドライグ「小娘……小僧貴様等は、何者だ!!。」

渚「俺は、爆炎を纏いし裁定者《フレイムルーラー》だ。」

骸「僕はただ平等なだけの悪平等な人外《ノットイコール》だぜ。」

渚「構えろドライグ一撃で終わらせる。」

ドライグ「やってみろ爆炎を纏いし裁定者よ……全力で叩き潰してくれ！」

凄まじい速度で突っ込んでくるドライグ、ただそれを待ち続け渚、ドライグが右腕を振り上げ全力で渚目掛けて振り下ろされるその一瞬黒い軌跡が走る。

ドライグ「次は負けんぞ爆炎を纏いし裁定者よ…。」

渚「貴様が龍である限り貴様に、勝利は無い。」

ドライグ「どうゆうことだ。」

渚「俺は爆炎を纏いし裁定者である前にハンターだ、唯の龍なんぞ敵では無い。」

ドライグ「そ…う…か…。」

渚がした事は単純明快、突っ込んで来たドライグに合わせ、太刀を抜刀しただけである。

サーゼクス「君達のお陰で助かったよ、私の名前はサーゼクス・グレモリー悪魔だ。」
アザゼル「俺からも礼をさせて貰うぜあんがとな、俺はアザゼル墮天使だ。」

ミカエル「私達からも有難う御座います、私の名前はミカエルです種族は天使です。」
渚「勘違いするな貴様等の為にしたのは無い、友の為にしたのだ。」

骸「そうだが、彼の言うとうりだ、もしアルトリアからお願ひされなかつたら放置してたからね。」

サーゼクス「アルトリアとは誰ですか？」

骸「其れは教えられないな。」

骸がそう答えると二人の身体が透けてきた。

サーゼクス アザゼル ミカエル「なっ!??。」

神様「二人とも準備が出来たからちやんとした時代に飛ばしすよ。」

渚「時間か。」

骸「そうだね。」

サーゼクス「じつ時間ってどうゆう意味だい？」

渚「そのままの意味だ。」

骸「それじゃ分かんないだろ、僕達は本来なら居るべき存在じゃ無い、今回は親友の為に無茶をしているからいつ戻されるか僕達にも分かんないだ。」

アザゼル「戻されるって何処に？」

骸「良くて座、最悪世界の外側かな?。」

ミカエル「それは、あまりにも酷すぎます!。」

骸「仕方の無い事さ、さてそろそろ限界だ、また会えるか分からないけどサヨナラ。」

渚「さらばだ。」

渚の挨拶を最後に二人とも消えてしまった。

サーゼクス「私達は彼女達のお陰で助かった、彼女達は私達の英雄だよ。」

アザゼル「だな…なら大戦なんざ巫山戯た事はもう終わりにしよう。」

ミカエル「私もそれに参加ですね、彼女のお陰で助かった命をその様な事で失くすのは、愚かです。」

サーゼクス アザゼル「ミカエルお前変わったな…。」

こうして大戦は終戦を迎え、渚と骸の二人は、悪魔 堕天使 天使の間で長年英雄として語り継がれていくのだった。爆炎を纏いし裁定者

原作開始

前回のあらすじ

渚は神器を使いドライグを倒し、骸は過負荷を使いアルビオンを封印した事により、三大勢力に英雄視された主人公達。

骸サイド

今回は僕視点からスタートだね、えつなにメタイって？そんなのほつといてよ。

さてあの後事を話そうか、神様に飛ばされた後に目が覚めたら赤ちゃんから、人生再スタートだったよだけどそれは良いけどね、三才ぐらいの時に両親が死んじゃってねとある人？に引き取って貰ったんだ。その人？の名前はバージルって言うんだ：そうあのバージルDMCのバージルだったんだ、最初は驚いたけど神様をお願いしてたの思いつきからは違和感は無かったかな？だけどダンテとかネロとかが家に来た時は本気で焦ったね、後神器に宿ってる英霊達の話は三人に話してあるよ、あの時は色んな意味で大変だったよ。

回想

骸「バージルお父さん、話したい事があるんだ。」

バージル「……………さっさと話せ。」

ダンテ「オイオイ子供相手にその対応はナシだろー。」

ネロ「骸ちゃん話してごらん。」

骸「ダンテ叔父さんとネロお兄ちゃん、えつとね僕の中に神器？つてやつがあるらしいよ？。」

バージル「ダンテ　ネロ「二」なっ何だと!??。」

バージル「どんなのだ。」

骸「えつとね英霊？の力が使える様になるらしいよ？。」

ダンテ「マジかそれはスゲー！」

ネロ「そんなの言ってる場合か！骸ちゃん誰が教えてくれたか教えてくれないか？。」

???「私が教えた。」

ネロ「誰だ！」

スカサハ「私は影の国の女王スカサハだスパードの子孫達よ。」

バージル「骸…他に誰がいる教えろ！」

スカサハ「大抵の奴はいるさだが、まだ出てこないだろう。」

ダンテ「如何してだ美しいレディ。」

スカサハ「ただマスターに過保護なだけだ。」

ダンテ「オーケー理解出来た骸ちゃん、の所為なら仕方ない。」

バージル「仕方ないか。」

スカサハ「全く持つてそのとうりだ。」

ネロ「誰か此奴ら止めてくれ：キリエが恋しいよ。」

骸「だいじょうぶ？ネロお兄ちゃん。」

バージル「さてスカサハといったな俺と死合いしろ。」

スカサハ「良からう、試してやるスパイダーの子孫よ！」

こんな感じでいきなりバージルお父さんがスカサハの師匠に喧嘩売って戦い始めたんだ、勿論スカサハの師匠が勝ったけどその後、ケルト出身の人達がバージルお父さんに死合いを挑むだけだね。

そんなこんながあつて今は高校二年生、今日は寝坊したから早く登校しなきゃね。

骸「バージルお父さん行ってきまーす。」

バージル「ああ行ってこい。」

次は俺視点だな、何だメタイってんな事ほつとけ。

神様に転生させられてから大変だったんだよ、両親が神父とシスターでな五才ぐらいの時に両親が同僚の人に殺されてな、それから妹と二人で色んな所に行きながら生きてきたんだよ…バチカンの神父はマジで怖かったよ、両親よ何故あの人達と交流があったんだ？。

??? 「お兄ちゃん、学校に遅れちゃうよ?。」

渚 「おおありがとなユー。」

この子が俺の妹の結月 優華だ

ユー (以後ユーと書きます) 「遅刻しちゃうよ? だから早く行こ?。」

渚 「ああそうだな。」

??? 「おい渚さっさと学校に行け。」

渚 「分かったよ。」

この人は言峰 綺礼あの麻婆神父だ何故この人がいるかと言いと、今俺たちの保護者をしていてるんだ。

綺礼 「ならば私は帰らせて貰おうか。」

渚 「今までありがとな。」

ユー 「有難う御座います。」

ユーが高校に行くまで家に居てくれたが今日で最後だ。

綺礼「礼を言うな、私は君達の両親に大きな恩があるんだ。」

渚「分かったよ…。」

綺礼「さっさと学校に行つてこい。」

渚 ユー「行つてきまーす。」

三人称視点

??? 「おいクロ!。」

学校に向かう途中で突然声をかけられた。

骸「あーシローだー。」

士郎「何だよその言い方。」

骸「別に何もないんよ!。」

士郎「なら良いが。」

シローの紹介しようか、シローの本名は衛宮 士郎 f e t a の主人公だったよ今は、
僕の幼馴染さ。

士郎「どうしたんだ上の空だぞ?。」

骸「何でもないよ?。」

士郎「クロがそう言うなら…。」

渚「どうした？ 士郎、クロがどうかしたのか？。」

ユー「骸先輩、士郎先輩おはようございます。」

骸「おはよーユーちゃんとナギ。」

士郎「おはようユーちゃんとナギ。」

渚「ああおはよ。」

雑談しながら登校する4人は学校前に着くと黄色歓声をあげる

「キヤー！渚先輩おはようございます!!。」

「骸ちゃん今日も可愛いよ!。」

「衛宮先輩後で弓の指導お願いします!。」

「ユーちゃん好きだー!!。」

何故こうなるかと言うとこの4人は、この学校：駒王学園の有名人だからだ。

二大お姉様のリアス・グレモリーと姫島 朱乃の二人。

三大イケメンの木場 祐斗、結月 渚、衛宮士郎の三人。

学園のマスコットの塔城 子猫と結月 優華の二人。

そして学園のアイドルの石神 骸である。

渚「おはよう。」

士郎「おはよう、指導なら放課後で。」

ユ一「私はお兄ちゃんが好きです。」

骸「僕は男だー!!!。」

このやり取りは最早朝の恒例になりつつある。

ユ一「お兄ちゃん、私の教室こっちだからまた放課後に。」

渚「また放課後でな。」

三人はユ一と別れ教室に向かう。

???「「イケメン死ねー!!!」」

教室に入ると早速馬鹿が渚と士郎に殴りかかる。

渚「よっと。」

士郎「おっと。」

しかしその拳は外れる。

この三人は渚達と逆の意味で有名人だ、変態三人組とよばれている。

元浜「くそツンなんでイケメンしかモテないんだ!。」

松田「そのとうりだ元浜!。」

一誠「なんで三人に掛かりでも当たらないんだよ!。」

渚「鍛えてるから。」

士郎「同じだ。」

骸「皆んな顔は良いからその、いつもの行動をしなければモテると思うよ?。」

元浜「おおよっぱり骸ちゃんは学園のアイドルだ!。」

渚「クロそんな奴に構う前に席に着いとけ。」

骸「はあーい。」

放課後

骸「なんか一誠が騒がしいよ。」

渚「行つて見るか。」

一誠「あつおい渚と骸ちゃん、見てくれ俺に彼女が出来たんだ!。」

夕麻「一誠くんの友達ですか?私の名前は天野 夕麻です。」

渚「友達ではないが自己紹介しとくか俺の名前は結月 渚だ。」

骸「僕の名前は石神 骸だよ!。」

一誠「夕麻ちゃんまた明日ね。」

夕麻「一誠くんまた明日。」

一誠「明日はデートだからじゃあな!。」

骸「ナギ。」

渚「分かつてるさクロ、天野は墮天使だ。」

骸「英霊に頼んで監視させて見るよ。」

渚「分かった、帰るぞクロ。」

デート当日

一誠「今日は楽しかったね、夕麻ちゃん。」

夕麻「そうだね一誠くん、……あつあの一誠くんお願いがあるんだけど?。」

一誠「俺で良ければ何でも。」

夕麻「なら……死んでくれないかな?。」

その言葉と共に彼女の服装が変わり背中から黒い鳥の様な黒い翼が生えた。

一誠「……………?!?。」

夕麻「恨むなら神様を、恨んでちょうだい。」

夕麻がそう言うのと彼女の手に光の槍が握られていた。

夕麻「さよなら一誠くん、初々しいデートで楽しかったよ。」

彼女はそう言うのと手に持っている槍を、一誠めがけて投げる。

???「其れは困るな、その少年はマスターの友人だからな。」

投擲された光の槍を、白い剣が弾く。

夕麻「っ?!?人間如きが至高の堕天使である私の槍を弾くなんて調子に乗るな!。」

一誠「貴方は一体……?。」

其処に居たのは、白髪で褐色の肌黒いスーツの様な鎧を纏い、上に赤い外套を着ている。

無銘「私のことは、無銘とでも呼んでくれ。」

無銘の返答が終わった瞬間に夕麻が槍を作り戦闘が始まる。

無銘「投影開始。」

無銘は一对の夫婦剣を投影する、槍を黒い剣干将で受け流し白い剣莫耶で切り裂くが、夕麻は身体を捻り躲す。

夕麻「貴方本当に人間……。」

無銘「私は人間だ。」

???「其処までよ!」

突然響く声の方を見ると紅い髪の女子高生がいた。

夕麻「紅い髪の悪魔……グレモリー家の者か!」

リアス「そうよ私はリアス・グレモリーよ!わたしの土地で勝手な事しないでくれませんかしら?。」

レイナーレ「グレモリー家の者よ私はレイナーレよ、其処の人間今回は退くが次は無いわよ。」

無銘「私としても二度目は勘弁願いたいがね。」

夕麻改めレイナーレは翼を羽ばたかせその場を後にした。

一誠「グレモリー先輩：どうなってるんですか?。」

リアス「貴方は確か家の学校の：なら明日また説明してあげる、貴方のクラスに使いをだしとくわ、さて今度はその貴方の番よ。」

無銘「残念だがマスターからの指示でね、帰らせてもらうよ。」

リアス「行かせると思ってるのかしら?。」

リアスがそう答えると無銘は一瞬笑みを浮かべると次の瞬間消えてしまった。

リアス「つ?!? 魔力を感じなかつたしそもそも魔法陣さえ出てなかつたのにどうやって?。」

一誠「リアス先輩俺はどうすれば?。」

リアス「取り敢えず今日は帰りなさい、また明日ね。」

二人の前から突然消えた無銘彼は一体何者なのか、駒王学園でその正体を知るのはマスターの骸と友人の渚だけであるのをリアスはしるよしもない。

原作紹介

前回のあらすじ

漸く原作が開始されたが渚と骸のイレギュラーの所為で少し運命が変わってしまつた。

一誠がデートした次の日。

一誠「本当に居たんだよ!。」

元浜「イツセー…そんなに言われても覚えてないんだよ。」

一誠「嘘だろ…なら松田はどうだ!。」

松田「悪いが俺も覚えてない。」

骸「なんか騒がしいけどなんかあつたの?。」

元浜「骸ちゃんかなんかイツセーに彼女が居たとか何とか。」

一誠「骸ちゃんは憶えてるか? ほら夕麻ちゃんの事!。」

渚「多分ク口と俺は憶えてるぞ一誠。」

骸「憶えてるよ。」

士郎「何だこの騒ぎは？」

一誠「本当か!?? そうだ士郎は憶えてるか?。」

士郎「一誠に彼女が居た事か? 憶えてるぞ。」

一誠「何で渚と骸ちやんと士郎しか憶えてるんだ?。」

渚「それは放課後にでも考えとけ、今は授業の事に集中しろ。」

一誠「分かったよ。」

放課後

??? 「兵藤一誠くんはいるかい?。」

「何で木場くんが変態と…」

一誠「変態で悪かったな、でだ木場が俺に何の要だ?。」

木場「リアス先輩の使いで来たんだ。」

一誠「……なら早く行こう。」

木場「そうだね。」

二人は教室を出て旧校舎の方に進む始めた。

木場「此処だよ兵藤くん。」

一誠「オカルト研究部。」

木場「部長兵藤くんを連れて来ました。」

一誠「お邪魔します。」

リアス「ようこそオカルト研究部に、部長のリアス・グレモリーよ。」

朱乃「福部長の姫島朱乃です。」

子猫「塔城子猫です…。」

一誠「二大お姉様の二人と学園のマスコットの子猫ちゃん!。」

子猫「煩いです…。」

木場「子猫ちゃんそう言わずに。」

リアス「改めて歓迎するわ…：：：悪魔としてね。」

リアスがそう告げると、一誠を除く全員から悪魔の様な翼が生えた。

一誠「っ?!? あっ悪魔!。」

リアス「そうよ悪魔よ、因みに昨日貴方を襲ったのは墮天使よ。」

一誠「夕麻ちゃんが墮天使だって…：：：、なら何で俺が襲われたんですか?。」

リアス「それは貴方に神器が宿ってるからよ。」

一誠「神器…何ですかそれ?。」

リアス「神様からの贈り物って言い方が一番会ってるかしら?。」

一誠「その神器はどうすれば出せるんですか?。」

リアス「貴方の思う最強を真似すればいいわ。」

一誠「わっ分かりました、ドラゴン波!!。」

一誠「かか〇め〇波の構えすると左腕の肘から下に赤い籠手が出て来た。

一誠「なんじゃこりゃー!!!。」

リアス「それが貴方の神器龍の手ね、効果は所持者の力を二倍する物ね。」

一誠「なんか地味ですね。」

リアス「仕方ないわ、さて一誠いやイツセーと呼ばせてもらうは、イツセー貴方私の眷属になる気はある?。」

一誠「眷属って何ですか?。」

リアス「教えてあげる。」

イツセーに三大勢力と悪魔に付いてついでに今回の事件について説明中。

リアス「さて分かったかしら?それで返答は?。」

一誠「リアス先輩俺を眷属にして下さい。」

リアス「分かったわイツセー此れから宜しくね、さてイツセー貴方は私の兵士として転生して貰うわ。」

一誠「はい!。」

リアス「凄いわイツセー!貴方兵士の駒全て使って漸く転生出来るわ。」

一誠「そんなに凄いですか?。」

渚「そうだが……どちら様で俺に何の様ですか?。」

ドーナシーク「我が名はドーナシーク、貴様には興味ないが上司からの命令でな死んで貰う。」

渚「そーですか、やっぱりこうなるか……来い!。」

渚がそう叫ぶと右手にデイケイドドライバーが握られていた。

ドーナシーク「まさか!既に覚醒していたとはだが、所詮人間だ墮天使である私には敵わない!。」

渚「そいつは如何かな?変身!。」

ドライバー「カメンライド!デイケイド!。」

ドーナシーク「なっ何だその姿は、そんな神器私はしらないぞ!。」

渚「俺が何者なのか?だと教えてやるよ、通りすがりの仮面ライダーだ!憶えとけ。」

渚は仮面ライダーデイケイドに変身しドーナシークに殴り掛かる、ドーナシークは咄嗟に身を躲し光の槍で反撃する、しかし渚は回し蹴りで槍を破壊しそのまま蹴り飛ばす、ドーナシークは脇腹を蹴られ3メートル位吹き飛ぶ渚はすかさずトドメを刺そうとする。

渚「これで終いだ!。」

ドライバー「ファイナルアタックライド!デイ!デイ!デイケイド!。」

渚とドーナシークの間にデカイ金色のカードが道を作る、渚は一番手前のカードに飛び掛かる、その姿勢は右脚を前に出し左脚を畳んでいた。

渚「ハァー!。」

ドーナシーク「馬鹿な!?!人間如きに!。」

ドーナシークは蹴りを喰らい爆発した。

渚「やつと終わったか……さて帰りますか。」

骸サイド

骸「ここに居るのかな?。」

骸は人気の無い古びた倉庫に来ていた。

???「美味そうな匂いがするぞ、甘いのか?。」

倉庫の奥から出て来たのは、上は裸で下は鱈の様な形をした。

骸「君かはぐれ悪魔のバイザー?。」

バイザー「ギャツギャツギャツギャツそうだとしたら如何する人間。」

骸「何簡単な事だよ……君を殺す!!。」

骸は普段だと考えられない様な気迫でバイザーに答える、骸は自分の中に居る英霊に鍛えられているが自分勝手な殺しを許さない。

バイザー「人間如きに私が殺せるか!。」

バイザーは怒り狂った様に暴れ始めるが骸には当たらない。

バイザー「小賢しいぞ人間!。」

骸「すぐ終わらせる。」

骸は禍々しい赤い槍ゲイ・ボルグを作り出し構えを取る。

骸「その心臓、貰い受ける!。」

骸「刺し穿つ死棘の槍!。」

骸の槍を避けるバイザー彼女は笑みを浮かべることが骸が笑みを浮かべている事に気付く、躲した槍がまるで映像の巻き戻しの様に戻りバイザーの心臓を穿つ。

バイザー「馬鹿な…躲したはず…なの…に…:…:。」

バイザーは心臓貫かれて死ぬ、その時倉庫の入り口から声が聞こえる。

リアス「はぐれ悪魔バイザー大公からの依頼で討伐にきたわ!こっこれは…貴方がやったのかしら?。」

骸「そうだね僕が殺つたよ、リアス先輩。」

骸はゲイ・ボルグを担ぎながら答える。

一誠「骸ちゃん!何で骸ちゃんがそんな物騒な物持つてるの?。」

リアス「イツセー彼?が三人の内の一人数、私も気になるから教えてくれるかしら

?。」

骸「神器で作りました、詳しい事は明日話します。」

リアス「分かったわ明日イツセーとオカルト研究部に来てちょうだい。」

骸「分かりましたではさよーならー!。」

骸はそう言い残し家に帰って行つた。

木場「部長先程使い魔から信じられない情報が来ました。」

リアス「何かしら?話してちょうだい。」

子猫「……木場先輩が信じられない事って何ですか?。」

朱乃「あらあら私も気になりますわ。」

一誠「骸ちゃんの事でさえ信じられないのに……今度は何だ?。」

木場「結局　渚くんが墮天使に襲われました。」

木場以外の全員「「「っ　っ?」」」

木場「其れだけではありません、何と未確認の神器で墮天使を返り討ちにしていました。」

リアス「信じられないわ!!幾ら神器が強いからって唯の人間に墮天使が倒せる訳ないじゃない!!。」

子猫「……私も信じられません……幾ら木場先輩だとしても。」

朱乃「あり得ませんわそんな事。」

リアス「そうだ！祐斗未確認の神器はどんな力なの！。」

木場「詳しいは分かりませんが、カードの様な物と不思議なベルトを使って変身して戦ってました。」

一誠「でも渚なら不思議と納得出来るな。」

リアス「どうゆう事？イツセー。」

一誠「渚の奴三人で殴り掛かっても余裕で躲けてましたし。」

リアス「分かったわイツセー…明日はもう一人も連れて来てちょうだい！分かった？。」

一誠「分かりました部長！。」

次の日の放課後

一誠「渚と士郎そして骸ちやん部長が呼んでるから付いて来てくれるか？。」

士郎「なんだいきなり別にいいけど。」

骸「一誠だけなの？。」

渚「断つても強制だろ、一誠さつきと行くぞ！。」

一誠「ああ付いて来てくれ。」

一誠「此処だ、部長連れて来ましたよ!。」

リアス「入ってちょうだい。」

士郎「お邪魔します。」

骸「お邪魔しまーす。」

渚「邪魔するぞ。」

リアス「よく来てくれたわね。」

渚「御託はいいから早く本題に入ってくれるか?。」

リアス「連れない子ね、さて貴方達を歓迎するわ………悪魔としてね。」

士郎「それがどうかしたんですか?。」

骸「今更過ぎるよねー。」

渚「知ってるわそんなん。」

リアス「うう本当弄りがいのない後輩ね、改めて自己紹介するわね、リアス・グレモリー三年生でオカルト研究部の部長をしてるわ因みにこの子達の王をしてるわ。」

朱乃「姫島 朱乃同じく三年で福部長をしています、グレモリー眷属の女王をしていますわ、よろしくお願いしますね。」

木場「二年生の木場　祐斗だよグレモリー眷属では騎士をしている、因みに神器持ちだよ。」

子猫「…塔城　子猫…一年生です…戦車です。」

一誠「兵藤　一誠だ、昨日悪魔に転生した因みに兵士だ!。」

リアス「次は貴方達の事を教えてくれるかしら?。」

士郎「分かりました、衛宮　士郎唯のしがない魔術使いです。」

骸「石神　骸だよ!神器持ちだよ。」

渚「結月　渚神器持ちだ。」

リアス「ありがとうね、さて神器と魔術について詳しく教えてくれるかしら?。」

骸「僕の神器は、英霊達の主人だよ!能力は過去、現在、未来のありとあらゆる英霊の力が使える様になるだ。」

渚「俺のは破壊者の神帯だ、能力は仮面ライダーと呼ばれる奴に変身出来る。」

士郎「俺が出来るのは此れだけです、投影開始。」

一誠　リアス「っ?っ?。」

士郎「贗作を創る魔術ですよ。」

リアス「士郎…貴方白髪で褐色の肌をした男を知らないかしら?。」

士郎「俺の知り合いにそんな人居ませんよ。」

一誠「本当か！確か：…名前は：…そうだ確か無銘だった！」

木場「部長その無銘って人が一昨日の墮天使と戦っていた人ですか？」

リアス「ええそうよ彼も士郎の様に呟いてたわ、投影開始って。」

朱乃「不思議な人ですね。」

骸「その人なら知ってますよ。」

リアス「っ！骸いえクロと呼ばせて貰うは、それは本当なのクロ？」

骸「本当だよだって家族だし、無銘来て！」

無銘「全くマスター君はそうペラペラと情報をバラして大丈夫か？」

一誠「貴方はあの時の！」

子猫「…この人が墮天使と…。」

朱乃「何やら特別な力は感じませんわ。」

木場「同じ剣士として一度試合を試してみたいね。」

リアス「とにかく！一昨日は助かったは、ありがとう。」

無銘「マスターに命令されてなその少年には死なれると困るのでな、それとその金髪
の少年私は剣士ではない弓兵だ。」

渚「どこの世界に夫婦剣主体で戦う弓兵がいる。」

無銘「現に此処にいるぞ。」

骸「後無銘は人間じゃないよ。」

リアス「人間じゃ無ければ何なのよ!。」

骸「落ち着いてよりアス先輩、無銘は英霊だよ。」

朱乃「ですが私は無銘さんの様な英雄を知りません。」

子猫「……赤い外套の弓兵……私知りません。」

無銘「仕方ない事だ、私は未来のしかも並行世界の英霊だ。」

一誠「並行世界か……カッケー。」

リアス「凄いわね、それも神器の力なの?。」

骸「そうですね。」

木場「渚くん君の神器はどんなのかな?。」

子猫「……気になります。」

リアス「そうね、渚神器を使ってちょうだい。」

渚「別に減るもんじゃねーからいいけどよ、変身!。」

ドライバー「カメンライド! デイクライド!。」

渚「こんな感じだ、俺の神器は。」

一誠「コッチもカッケー!。」

渚「ふう、疲れた。」

朱乃「そんな疲れるのですか?。」

渚「いや、そんな疲れないが?。」

子猫「: : : なら何で?。」

渚「なんとなくだ。」

リアス「凄いわ三人共、貴方達私の眷属にならない?。」

士郎「夢が叶うなら良いですよ。」

骸「イヤです。」

渚「冗談じゃねーよ、断る。」

リアス「理由をきかせてくれるかしら?。」

骸「ギルとかに殺されるから!。」

渚「両親が神父とシスターだったから、教会に知り合いが多いんだよだからだ、しかも勝手に悪魔になってたらあの人に何されるか、分かったもんじゃねーよ。」

リアス「それは残念ね、士郎の夢を教えてくださいるかしら?。」

士郎「正義の味方になる事です。」

無銘「それは辞めとけ。」

士郎「何だと人の夢に口を出すのか!。」

無銘「正義の味方に成るのはいいが、悪魔になったら其処でおしまいだ。」

士郎「どうゆう事だ!。」

無銘「簡単な事だ、正義の味方は人間だから正義の味方に成れるそれ以外は、正義の味方には成れない。」

士郎「成る程確かにその通りだ、リアス先輩済みませんが眷属にはなれません。」

リアス「それなら仕方ないわね、その代わり三人共オカルト研究部に入部してもらわ。」

士郎 渚 骸「二了解。二」

こうして原作介入を果たした二人これからどう成るかは神のみぞ知る。

渚、シスターと出会う

前回のあらすじ

悪魔に転生した一誠と神器を持つてるの事がバレてしまう二人はオカルト研究部に
入部する。

朱乃「クロちゃん少しいいかしら?。」

骸「何ですか?朱乃先輩。」

朱乃「大きな盾を使う英雄を知りませんか?。」

骸「知ってますけど何ですか?。」

朱乃「見せてくれませんか?。」

骸「別に良いですけど。」

骸は盾を取り出した。

骸「朱乃先輩これでいいですか?。」

朱乃「ええ。」

骸は盾を消した。

リアス「どうしたの朱乃、貴方らしく無いわ。」

リアスが朱乃にそう伝えると突然朱乃が骸を抱きしめた。

骸「朱乃先輩!!? 何で!!?。」

一誠「骸ちゃん羨ましい。」

士郎「リアス部長朱乃先輩は何故、クロに抱きついたんですか?。」

子猫「朱乃先輩羨ましい:。」

木場「朱乃先輩が: 珍しいですね。」

朱乃「やつと見つけましたわ、もう絶対離しません。」

リアス「これは朱乃の過去に関わる事なの、私の一存では話せないわ。」

骸「むぐーうー。」

渚「朱乃先輩とりあえずクロを抱きしめる力を弱めて下さいじゃ無いと、またクロが

胸で死にかけてます。」

朱乃「: : : 渚くん今何て言いましたか?。」

渚「(ヤツベしくった) またクロが胸で死にかけてますと、言いました。」

朱乃「また: : : またですか、一体何処の誰が私のクロちゃんに胸を押し付けたんですか

?。」

??? 「其れは余の台詞だ、余の奏者に何をする!。」

突然響く声に驚くオカルト研究部一同次の瞬間、朱乃の胸に埋まっていた骸を奪う赤いドレスを着た美少女。

骸「ネロ待つて胸を押し付けないで。」

ネロ「良いでわないか奏者よ、余の身体は至高の芸術なのだぞ？」

リアス「クロ其方の方は誰かしら？なるべく早く答えてくれるかしら？。」

朱乃「私のクロちゃんを返しなさいよ!!」

ネロ「余の事か？うむ聞かれたのなら仕方ない、余の真名はネロ・クラウディウスだ！。」

リアス「ネロ・クラウディウスですって!。」

一誠「部長そのネロ・クラウディウスってそのな凄い人なんですか?。」

ネロ「余の事を知らないのか?」

骸「むぐーううーぶはあ……死ぬかと思った：一誠ネロはローマ帝国の第五代皇帝なの。」

渚「それだけじゃない本来ならネロは男だ。」

リアス「渚とクロの言うとりだわ、何故女性なのかしら?。」

ネロ「余は生前男装していたぞ。」

朱乃「それよりも早く私のクロちゃんを返しなさい!。」

ネロ「奏者よあの女とはどんな関係なのだ答えよ！嘘は許さん。」

骸「昔ちよつと朱乃先輩と母親の命を助けただけだよ。」

ネロ「奏者よ！余はその事知らないぞ！」

骸「だって誰にも言つてないもん。」

士郎「昔つてどれぐらいなんだ？」

朱乃「私が6歳の時でしたね、あの時はもうダメだと思いました。」

木場「あれ？渚くんは何処に行つたの？」

子猫「…先ほど帰りました。」

骸「むうーううー！」

渚サイド

部室を抜け出して家に向かっている途中にシスターを見つけた。

???「はう！」

そのシスターは何もない場所で転んだ。

渚「おい大丈夫か？」

???「ううまた何も無い場所で転んでしまいました、ああ主よこれもあなたの試練なの

ですか？」

渚「多分違うと思うわ、それより何でこの町にシスターがいるんだ?。」

アーシア「私の言葉が分かるんですか!よかった言葉が通じる人に出逢えました、私の名前はアーシア・アルジェントです。」

渚「俺の名前は結月 渚だ適当に渚とでも呼んでくれ。」

アーシア「分かりました。」

渚「俺は適当にアーシアって呼ばせてもらうぜ、ところでアーシアは何故この町に来たんだ?。」

アーシア「この町の教会に配属されました。」

渚「大体理解した、概ね教会の場所がわからないんだろ案内してやるよ。」

アーシア「ありがとうございます!主よこれもあなたのおかげです。」

途中アーシアが怪我した男の子を神器で治療していた、その時のアーシアの顔は悲しそうだった。

渚「アーシアここが目的地の教会だ。」

アーシア「渚さんは聞かないんですね。」

渚「神器の事か?。」

アーシア「知ってたんですか。」

渚「俺も神器を持つてんのよ。」

アーシア「そうですねか…渚さん聞いてくれますか?。」

渚「話して楽になるならな。」

アーシアは話してくれた、神器のおかげで聖女として教会に祭り上げられてた事、神器で手負いの悪魔を治療した事が露見した瞬間手の平返して異端認定されて追放された事。

アーシア「これが今までの体験して来た話です。」

渚「アーシアはよ、後悔してねえのか?。」

アーシア「…後悔して無いと言えば嘘になります。」

渚「…俺の両親も教会の人間だった。」

アーシア「そうなんですか、両親は今何してるんですか?。」

渚「…死んださ。」

アーシア「っ!??ごめんなさい。」

渚「アーシアが悪いんじゃない、悪いのは両親に嫉妬した教会の人間だ。」

アーシア「どうゆう事ですか?。」

渚「殺されたんだよ、同じ教会に所属してた同僚に。」

渚「アーシアはさ、知ってるか?教会最強の夫婦を。」

アーシア「知ってますよ勿論、ですがなんでですか?。」

渚「俺の両親だよその二人は。」

アーシア「ですがそのお二人は確か悪魔に殺された筈です。」

渚「教会が他のエクソシストをやる気にさせる為に流したデマだ。」

アーシア「そっそんな!。」

渚「アーシア、もし助けて欲しかったら俺に助けを求めろ必ず助けてやるよ。」

アーシア「分かりました。」

渚「またな、アーシア。」

アーシア「またです、渚さん。」

その日夜

渚「こんな時間に電話か、どうした部長。」

リアス「お願いがあるの。」

渚「断ると、言いてえが部活の時の事もある受けてやる。」

リアス「ありがとうね、さて内容はイツセーと一緒に契約に行つて欲しいの。」

渚「了解、場所はメールで送つてくれ。」

渚「此処か。」

一誠「渚！遅いぜ。」

渚「悪かったよ、ほれさっさと契約取るぞ。」

一誠「そうだな、すいませんグレモリー眷属です願いを叶えに来ました。」

渚「返事がねえ…嫌な予感しかしねえ、一誠神器の準備だけはしとけ。」

一誠「わっ分かった。」

渚「俺が先に入る。」

渚「一誠!!?こつちに来るな!。」

一誠「どうしたんだよ……うぁー!。」

渚「だから行つただろうが。」

そこにあるのは血塗れで壁に張り付けられた惨殺死体だった。

一誠「誰がこんな事。」

渚「壁に血文字が。」

???「それは悪い事する人にはお仕置きをって言う聖なる方のお言葉を借りた物です

よー。」

一誠「誰だテメエ!。」

フリード「俺ちゃんの名前はフリード・セルゼン、エクソシストしてるぜ！ちなみにお前達の名前は言わなくもだいじよーぶ！悪魔と悪魔に魅入られた人間の名前なんて憶える価値なし？それよりも死んでくれる？安心していい気づいたら死んでるからよおくだからさっさと死ね！」

渚「誰が死ぬか！変身！」

ドライバー「カメンライド！デイケイド！」

フリードは剣の柄を懐から取り出して刀身を作り出す、渚はデイケイドに変身して対抗するフリードは光の剣で渚を斬りつけるが全て弾かれる。

フリード「さっさと死ねよ！」

渚「断る！」

アーシア「きやー！！」

一誠「女の子？」

アーシア「フリード神父！これはどうゆう事ですか！」

フリード「あれあれえーアーシアちゃん教会で教わりませんでしたかあ悪魔は糞で悪魔と契約する人も糞だつて？」

アーシア「それでもやり過ぎです。」

アーシアとフリードが口論してる時、リビングの床が光り出した。

フリード「これはグレモリーの魔法陣。」

リアス「そのとうりよ、はぐれエクソシスト。」

一誠「あれがはぐれエクソシスト。」

フリード「流石にこの人数相手にするのはイヤだね！な訳ではないならー。」

リアス「ごめんなさいはぐれエクソシストが入るなんて。」

一誠「大丈夫です部長。」

渚「アーシア大丈夫か？。」

アーシア「渚……さんですか？。」

渚「こんな姿ですまない。」

アーシア「いえ……大丈夫です。」

木場「部長、複数の墮天使がこの家に向かって来ています。」

リアス「裕斗それは本当？なら早速部屋にジャンプするわよ。」

渚「部長俺はアーシアと家に帰ります。」

木場「それは危険だ。」

渚「どうせ人間の俺はジャンプできないんだろ。」

リアス「魔法陣を調整すればいけるわ。」

渚「カブトならもつと早く脱出出来る。」

リアス「カブト?。」

渚「部長は先に脱出を。」

リアス「分かったわ、ただし絶対生きて帰って来るのよ。」

渚「了解!。」

アーシア「何で残ったんですか?。」

渚「アーシアを助ける為だ、変身!。」

ドライバー「カメンライド!カブト!。」

渚「アーシア気づいたら俺の家に着いてるから、驚くなよ?。」

アーシア「どうゆう事ですか?。」

渚「いいからじっとしてろ」

ドライバー「アタックライドクロックアップ」

渚「早速帰りますか。」

渚はクロックアップを使いアーシアと家を脱出して自分の家に帰って行った。

ドライバー「クロックオーバー。」

渚「アーシア目的地に着いたぞ。」

アーシア「早くないですか!渚さんはっ早く下ろして下さい。」

渚はアーシアをお姫様抱っこで運んでいた。

渚「おおすまない。」

アーシア「うう／＼／＼初めて男の人にお姫様抱っこして貰いました／＼／＼。」

渚「アーシア何顔赤くしてんだ？早く家に上がれよ。」

アーシア「はいい。」

渚「アーシアはこれからどうするんだ？。」

アーシア「もう教会には帰りたくありません。」

渚「なら家にいればいい。」

アーシア「いいんですか！。」

渚「アーシアなら問題ない、だが問題はまだある。」

アーシア「レイナーレ様の事ですね。」

渚「レイナーレ？。」

アーシア「渚さんには話してなかったですね、私をこの町に呼んだ墮天使さんです。」

渚「成る程……レイナーレのやりたいことが分かった。」

アーシア「それは何ですか？。」

渚「アーシアの神器を取り出す事だ。」

アーシア「そんな事すれば神器保有者は。」

渚「ああ勿論死ぬ、神器は保有者の魂と深く結びついてるからな。」

アーシア「そんな……。」

渚「アーシア：助けて欲しいか?。」

アーシア「助けてくれるんですか?。」

渚「昼に俺は何て行った?。」

アーシア「確かに助けを求めるなら渚さんに求めろと。」

渚「ああ確かにそう言った。」

アーシア「渚さん：助けて下さい。」

渚「任せろアーシア。」

アーシアは渚に抱きついて泣いた、渚はそんなアーシアの頭を撫でながら抱きしめ返した。

???「ニャー。」

アーシア「きやつ!。」

渚「おおいたのか黒歌。」

アーシア「黒歌ですか。」

渚「ああ家の飼い猫だ、アーシアはどっかの部屋で寝ててくれ。」

アーシア「はい、渚さん何でレイナーレ様のやりたいことが分かったんですか?。」

渚「墮天使のボスが神器好きなのは割と有名だ、アーシアの神器は珍しいから上司に

渡して昇進しようとしてるんじゃないかねえか？つて考えた訳だ。」

アーシア「成る程：渚さんおやすみなさい。」

渚「おやすみアーシア。」

渚「さてクロに電話掛けるか、……クロか？。」

骸「なにナギ？こんな夜遅くに。」

渚「悪い、だが大事な話だ。」

骸「乗ったよナギ。」

渚「なにも話してないんだが……。」

骸「ナギの頼み事なら大抵の事は手伝うよ。」

渚「サンキュークロ、今回やる事は簡単だこの町に隠れてる墮天使共を殺るぞ。」

骸「了解くんじゃまた明日。」

次の日の放課後

渚「クロ準備はいいか？。」

骸「ナギこそ。」

渚 骸「「突撃！」」

フリード「あれあれえ〜昨日悪魔と一緒にいた人間と今度は可愛い女の子とじゃああないですか！。」

骸「今すぐ墮天使が何処にいるか教えてくれたら見逃すよ。」

フリード「悪魔と一緒にいる人間の話なんか聞かねえよ！ さっさと死ぬ！」

骸「王の財宝。」

骸の後ろに黄金の波紋が浮かび中から最上級の聖剣や聖槍がフリードに向けられる。

骸「これでも…ダメ？」

フリード「墮天使は地下にいやすぜ、て事で俺ちゃんはここで。」

フリードは懐からフラッシュパンを取り出し地面に叩きつける。

骸「行こうナギ。」

渚「おっおう。」

二人は教会の地下に降りていく。

レイナーレ「アジアどこ？ さっさとさがしなさいよ！」

渚「アジアなら俺の家にいるぜ墮天使。」

レイナーレ「何故！ 人間が此処にフリードはどうした！」

骸「フリード神父ならさっさと逃げましたよ。」

レイナーレ「やっぱ人間は使えない…アジアの居場所をわざわざ教えてくれてあ

りがどうね、下等種族の人間。」

渚「勘違いするなよ、俺達はお前らを始末しに来た。」

レイナーレ「人間如きが！大口を叩くのは程々にしとけ。」

渚「クロ残りの二体は任せたぞ！変身！」

ドライバー「カメンライド！デイケイド！」

骸「任されたよナギ。」

レイナーレ「ミッテルト、カラワーナそっちの人間は任せたわよ。」

ミッテルト「はいレイナーレお姉様。」

カラワーナ「調子乗るなよ人間。」

渚 骸「速攻で終わらせる。」

渚「十秒で終わらせる！」

ドライバー「カメンライド！ファイズ！」

レイナーレ「姿を変えたところで至高の墮天使である私には敵わない！」

渚「なら…躲してみろ！」

ドライバー「フォームライドファイズ！アクセル！」

アクセルウオッチ「start UP。」

渚は仮面ライダーファイズに変身しアクセルフォームになった。

レイナーレ「何だ！この赤いポインターは！」

レイナーレの周りには20以上のポインターが浮かんでいた。

渚「これがファイズの必殺技！多重ロックオンクリムゾンスマッシュだ！」

レイナーレ「私は至高の墮天使に！」

アクセルウオッチ「3・2・1…タイムアウト」

レイナーレはフォトンブラッドを大量にくらい死んでしまった。

ミツテルト「レイナーレお姉様が！」

カラワーナ「ミツテルト今は目の前の敵に集中しろ！」

骸「もう遅いよ、禁手インストール」

カラワーナ「禁手だと！」

骸「クラスバーサーカー指定、真名フランケンシュタイン」

骸は禁手を使い英霊と同化する、骸の服装は花嫁衣装に変わり手にはメイスが握られ

ていた。

骸「宝具真名解放、…私と、いっしょに、こい。……………磔刑の雷樹!!!」

ミツテルト カラワーナ「キヤーーー!!!」

骸の真名解放による一撃で消滅するミツテルトとカラワーナ。

渚「宝具解放はないだろクロ。」

骸「ナギだつてアクセルフォームは酷いよ。」

一誠「墮天使共グレモリーの土地でなにしてる！つて渚と骸……ちゃん……。」

木場「どうしたのイツセー……く……ん……。」

子猫「どうしましたか木場……先……輩……。」

リアス「皆んなどう……し……た……

の……。」

朱乃「クロちゃん何処に……い……る……の……可……愛……い……！」

骸「ちよつと朱乃先輩つてむぐー！」

リアス「クロのあの姿の事は説明出来る？渚。」

渚「あれはクロの禁手だ、効果は英霊との同化だ。」

リアス「禁手ですって！」

木場「何の英霊と同化したんだろ？」

渚「英霊と言うより反英霊だな。」

一誠「反英霊って何だよ？」

渚「反英霊は人類の敵でありながら人類に貢献した奴の事だ、メドウーサとかが代表
だな。」

子猫「ならどんな反英霊何ですか？」

渚「フランケンシュタインだ。」

一誠「フランケンシュタインと言うとあの怪物か。」

骸「むぐーううーぷはあ：一誠違うよフランはアダムを元にした人造人間だから、フランケンシュタインの花嫁とは別物だよ。」

リアス「解説ありがとうね、けどもう二度と勝手な行動はしないでね特にクロ貴方はね。」

渚「部長ちよつと頼みたい事があるんだが。」

リアス「何かしら?。」

渚「アーシアを学園に入学させてくれ。」

リアス「それならもう準備出来てるわ。」

渚「ありがとうございます。」

骸「一誠その神器どうしたの?。」

一誠「聞いてくれたか!骸ちゃんこれは赤龍帝の籠手つて言う神器でロンギヌスなんだと。」

骸「ふうーん、ドライグも可哀想だねだつて一誠みたいな変態が宿主なんだからね。」

一誠「ゴフウ!!。」

そんなやり取りがありながら教会にいた全員はオカルト研究部に帰るのであった。

ライザーフェニックス現る

前回のあらすじ

アーシアを意図せず墮とした渚は骸と共に墮天使レイナーレ達に地獄を見せる。

教会での事件が片付いた後無事アーシアが学園に来た、その日の放課後にオカルト研究部に集まる事になった。

リアス「さあ新しい部員が増えたからパーティーしましょうか。」

リアスが指を鳴らすと机の上にケーキやお菓子が出て来た。

リアス「このケーキを焼いたのが無銘で、お菓子を士郎が作ったわ。」

子猫「凄くモグモグ美味しいモグモグですモグモグ。」

木場「子猫ちゃん喋るか食べるかどっかにしようか。」

子猫「分かりました：モグモグモグモグモグモグモグモグモグ。」

士郎「そんな急がなくてもならないよ。」

渚「てか、俺らの時はなかったなパーティー。」

リアス「それも含めてよ。」

骸「そんな事より誰か助けてー!。」

朱乃「そんな暴れてはダメですよ?これは私の事を心配させた罰なんですからね。」
アーシア「朱乃先輩羨ましいです。」

渚「アーシア朱乃先輩の何が羨ましいんだ?。」

アーシア「はう!なっ何でも無いです。」

渚「それなら良いが:一誠そこだけアーシアが座れないだろ。」

一誠「断る!部長の隣は俺のもんだ!。」

渚「わかったよ:アーシアちよつとごめんな。」

アーシア「きやつ!なっ渚さんの膝の上///。」

渚「一誠お前はクロの事羨ましがらないんだな。」

一誠「この前の花嫁姿見たらなんか:男に見れなくなつた。」

木場「イツセーくん:…僕もだ。」

子猫「あれは反則です///。」

リアス「何かしらこのクロに対する感情?恋愛でも無いし:…母性本能かしら?。」

アーシア「私も見て見たかったです。」

ネロ「ええい!余の奏者を返せ!。」

朱乃「嫌よ!クロちゃんは絶対渡さないわ!。」

骸 「誰でも良いから助けて！」

??? 「雑種！我の妻に許可なく触れている！万死に値するぞ！」

骸 「誰でも良いって言ったけどなんでギルがくるの！」

ネロ 「金ピカよ！奏者は余の奏者だ！」

朱乃 「大体男が男を娶るなんてあり得ないわ！」

一誠 「また誰かでてきましたね。」

子猫 「男に妻って言われる骸先輩。」

木場 「子猫ちゃん、突っ込んだら負けだと思っようよ？渚くんと骸ちゃんに聞しては。」

渚 「解せぬ。」

アーシア 「渚さんには私が付いてます！」

リアス 「今度は誰かしら？」

骸 「ギル！自己紹介だけは絶対してね！」

ギル 「本来なら雑種共なぞに我の名なぞ教えんが、妻のわがままに答えてやるのも夫の務めだ。」

ギル 「我は！古代メソポタミア文明都市ウルクの王にして！人類史最古の王！英雄王ギルガメッシュだ!!。」

一誠 「ギルガメッシュって俺でも知ってるぞ！」

子猫「ギルガメツシユは男色家だった?。」

ギル「その白髪の雑種よ!我に性別など関係ない!。」

リアス「どうゆう事???。」

渚「それはギルガメツシユの宝具に關係する事だ。」

ギル「ほおその雑種の魂は珍しいな、雑種よ名を名乗れ。」

渚「渚です、我等が王よ。」

ギル「礼儀もなつてゐるな、氣に入つた特別に名で呼ばれる事を許可しよう。」

渚「はっ!有難き幸せです。」

ギル「さて渚が言つたとうりだ、我の財の中には性別を弄れる靈藥など幾らである。」

朱乃「じゃ!その氣になればクロちゃんを女の子に出来るの!。」

士郎「お菓子の追加を持ってきたらどうなつてゐるんだ?。」

ギル「ほお贗作者が居るとは、此れは此れは踰越。」

士郎「???。」

その後ギルが場をかき乱してカオスな事になつたことを記してをこう。

レイナーレ事件から二週間後

一誠「皆んな聞いてくれ!リアス部長に夜這いされた!。」

士郎 渚 骸「二遂に一誠が壊れた!!!。」

一誠 「壊れてないわ!。」

士郎 「クソツこうゆう時に治療系魔術を学んでおくべきだった!。」

渚 「一誠……俺に出来るのは苦しまず殺す事だけだ……。」

骸 「どうしよう! 宝具は神性が高すぎるから悪魔には使えないし……そうだアーシアに癒してもらおう!。」

士郎 渚 「それだ!!!。」

一誠 「落ち着け!。」

士郎 渚 骸 「「うん、凄く落ち着いた。」」

一誠 「ボケてる場合か!。」

渚 「取り敢えず放課後にオカルト研究部で話そう。」

一誠 士郎 骸 「「わかった。」」

放課後

木場 「みんなもこれから部室に?。」

渚 「木場もか?なら一緒にいくぞ。」

部室前

木場 「部室前にきてようやく分かるなんて……修業不足だね。」

一誠「部室に誰かいるのか?。」

士郎「ああかなりの強者だ。」

渚「悪くて上級悪魔、最高で最上級悪魔だな。」

アーシア「渚さんは壁越しでも分かるんですか。」

骸「でも敵意はないね。」

木場「わかった、部長失礼します。」

一誠「失礼します。」

士郎「失礼します。」

渚「邪魔する。」

アーシア「失礼します。」

骸「失礼します。」

???「そちらの兵士が今代の赤龍帝で後ろの四人がお嬢様の協力者ですか。」

渚「そうだが、そちらさんは誰だ?。」

グレイフィア「申し訳ございません。自己紹介が未だでした。グレイフィア・ルキフ
グスと申しまし、魔王ルシファー眷属の僧侶しております。」

士郎「衛宮 士郎です、しがたない魔術使いです。」

渚「結局 渚だ、仮面ライダーをやってる。」

アーシア「アーシア・アルジェントです、聖母の微笑みを持っています。」

骸「石神　骸だよ、英霊達の主人の持ち主なんだ。」

グレイファイア「……………失礼します。」

ナデナデ　　骸の頭を撫でる音

骸「えへへえ／＼／。」

グレイファイア「……………可愛い／＼／。」

朱乃「グレイファイアさんクロちゃんは、私のです!。」

骸「僕は誰のでもない!。」

グレイファイア「朱乃様、骸さ……………」

クロちゃんもこう言っているので私が愛でも問題はありません。」

子猫「なら私も……………」

渚「如何してこうなった。」

士郎「なんですか。」

木場「アハハハ。」

リアス「グレイファイアが壊れた!。」

アーシア「皆さん落ち着いて下さい!。」

リアス「ありがとうアーシア、グレイファイアがいる理由を話すわね実は……。」
その時部室に魔法陣が輝く。

木場「フェニックス……。」

???「人間界は久しぶりだぜ、会いに来たぜ愛しのリアス。」

一誠「部長誰ですか？このホスト崩れの人は？。」

グレイファイア「一誠様此方の方は、リアスお嬢様の婚約者のライザー・フェニックス様です。」

一誠「エエー！婚約者！」

ライザー「リアスの女王が淹れてくれたお茶は美味いぜ。」

朱乃「あらあら、ありがとうございます。」

渚「で省略すると、部長はライザーと結婚したくないから一誠に夜這いしたんだな？。」

リアス「ええその通りよ、ライザーよりイッセーの方が良いもの。」

ライザー「リアス…君の家は後継者が君しかないんだろ？」

リアス「そうだけど……。」

ライザー「なら早く俺と結婚して純潔悪魔を産んでくれよ。」

リアス「約束通りなら、私が大学卒業するまで何も口を出さない約束の筈よ!。」

ライザー「君の御父様も焦っているんだろ。」

リアス「嫌よ!ライザーなんかとは絶対結婚しないわ。」

ライザー「………リアス俺はなフェニックス家の看板を背負ってるんだ。その名に泥を塗る事なんてできない!ましてやフェニックスは炎と風を司るんだ、人間界の汚れた炎と風には耐えられん!リアス君の此処にいる全員焼き殺してでも連れて行くぞ!。」

ギル「焼き鳥風情が我の妻を殺すだと?調子に乗るなよ!焼き鳥。」

ライザーが部屋に炎を撒き散らすとライザーの前に黄金の波紋が浮かび中から聖剣や聖槍などの悪魔にとって有害な宝具が顔を出す。

ギル「焼き鳥よ、この我が直々に殺してやる。感謝しろよ?焼き鳥!。」

骸「閉じて王律剣ハヴ!!イル!。」

ギル「我が妻よ何故?焼き鳥なぞ助ける。」

骸「ギルが殺す価値もないから。」

グレイフィア「ありがとうございますございますクロちゃん、さて話し合が意味を成さないのは

と士郎とアーシア。レーティングゲームまで10日間の時間がある。

次の日

一誠「修業するのはいいけどこの荷物どうにかならない?。」

リアス「イツセーそれも修業よ。」

子猫「……………お先失礼します。」

木場「部長料理に使える山菜を採りました。」

士郎「頑張れ一誠。」

渚「アーシアは大丈夫か?。」

アーシア「はい!渚さんが抱えてくれてるお陰で。」

骸「自分で歩けます!朱乃先輩。」

朱乃「ダメです、別荘に着くまでこのままですよ。」

一誠「やつと……………着いた。」

リアス「皆んな動きやすい服に着替えて来て!。」

木場「イツセーくんのぞかないでね?。」

一誠「ぶち殺すぞ木場!。」

骸「一誠が壊れた!。」

渚「この人でなし!。」

アーシア「イツセーさん今治療しますね!。」

リアス「皆んな着替えたわね、これから修業を始めるわ。」

骸「部長少しいですか?。」

リアス「何かしら?クロ。」

骸「いやいやチョットお手伝いをね?、無銘と李書文来て!。」

無銘「何の用かね?マスター。」

李書文「何用か?マスター。」

骸「無銘は木場と士郎に剣製の師匠を李書文は子猫ちゃんに八極拳を教えてあげて。」

無銘「了解したマスター。」

李書文「おうとも。」

リアス「クロはなんでもありね。」

渚「部長俺は一人で修業させてもらう。」

リアス「何故かしら?。」

渚「俺の神器に仮面ライダーを召喚する機能がある。今回はクロツクアップの時間を伸ばすためマスクドライダー達を召喚するから一人の方が都合がいい。」

リアス「分かったわ、さて修業開始よ!。」

木場&士郎サイド

無銘「さて先ずは君達の劍製を見せて貰おうか。」

木場「はい！ 魔劍創造！」

士郎「投影開始！」

無銘「ふむ……ダメだな。」

木場「何故ですか！」

無銘「幾つかあるが先ずはそうだな……基本骨子の想定が弱すぎる次に劍製の速度が足りない。」

士郎「なら無銘はどうなんだ？」

無銘「ふむ私か？ まあいい投影開始。」

士郎「はっ早い！」

無銘「私達は劍を魔力で創っているからこんなのも出来る……ふっ……壊れた幻想。」

木場「劍が爆発した!?!？」

無銘「劍の魔力を暴走または暴発させる事で出来る芸当だ。」

士郎「こんなの俺に出来るのか？」

無銘「ふむ……マスターに習って盛大なネタバレをするか。」

木場「盛大なネタバレ？」

エミヤ「私の真名はエミヤシロウだ：そこにいる衛宮　士郎の一つの可能性だ。」
 士郎「なんでさ!。」

木場「士郎くんが英雄に……。」

エミヤ「君達がこれから敵対するのはフェニックスだ、今の君達では敵わない……だからせめてイメージしろ。現実で敵わない相手なら、勝てるものを幻想しろ。」

木場「勝てるものの幻想……。」

士郎「幻想……か。」

エミヤ「忘れるな。イメージするのは常に最強の自分だ。外敵など要らぬ。お前らにとつて戦う相手とは、自身のイメージに他ならない。」

木場「常に最強の自分。」

士郎「自身のイメージか。」

エミヤ「一つ此処で私が築き上げたものを披露してやろう。」

I a m t h s b o n e o f m y s w o r d

体は剣で出来ている。

S t e e l i s m y b o d y , a n d f i r e i s m y b l o o d

血潮は鉄で、心は硝子。

I have created over a thousand blades

幾たびの戦場を越えて不敗。

Unknown to Death

ただの一度も敗走はなく、

Not known to Life

ただ一度も理解されない。

Have withstood pain to create many

pon

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う。

Yet, those hands will never hold anythi

ng

故に、その生涯に意味はなく、

So as I pray, Unlimited Blade Works

その体は、きつと剣で出来ていた

エミヤが詠唱を終えると世界が変わる。荒廃し荒れ果てた丘には数多の剣が突き刺

さり、空は夕焼けで大きな歯車が浮いていた。

木場「こつ！これはまさか！」

士郎「固有結界か！」

エミヤ「そうだ固有結界

無限の剣製だ、これからの修業はこの場で行う。

—— ついて来れるか。

ご覧の通り、君達が挑むの無限の剣。剣戟の極致！恐れずしてかかってこい！！

木場 士郎「やってやる!!」

子猫&李書文サイド

子猫「李書文さん少しいですか?。」

李書文「何用だ?猫の小娘よ。」

子猫「!!?気付いてたんですか?。」

李書文「カツカツカ!マスターの中には魔境だからな一目で分かる。して何の用か?。」

子猫「骸先輩はどれ位の英霊に好かれてるんですか?。」

李書文「カツカツカ!なんだ小娘、マスターに惚れたか?。」

子猫「///……はい。」

李書文「ローマ帝国第五代皇帝、騎士王、九尾の狐の妖怪、旗振りの聖処女、英雄王、影の国の女王、鬼、他にもいるの。」

子猫「大物揃いですね……。」

渚「ハアアー!。」

その日の夜

リアス「今日の感想はどう?皆んな!。」

木場「無銘さんのお陰で剣製が強くなりました。」

士郎「無銘のネタバレが凄かった。」

エミヤ「改めて自己紹介を使用、真名エミヤ シロウだ。」

リアス 朱乃 子猫 一誠 アーシア「二二えっ!。」

一誠「士郎が英雄に……。」

リアス「士郎……貴方私の眷属になってくれないかしら?。」

朱乃「リアス……その話は断られたじゃない。」

士郎「リアス部長……いいですよ。」

子猫「衛宮先輩イイんですか?正義の味方になれませんか?。」

士郎「ああそれでもだ。」

リアス「……何で今になってから眷属の話を受けてくれるのかしら?。」

士郎「エミヤの話を聞いてからです。」

アーシア「エミヤさんの話ですか?。」

リアス「エミヤ……私達にも話してくれるかしら?。」

エミヤ「分かった、これは私の存在に関係する話した。子猫「存在?。」

エミヤ「私は英雄では無い。」

朱乃「では、どうやって英霊になったんですか?」

エミヤ「私は死ぬ時に世界と契約して守護者になった。」

アーシア「守護者?。」

リアス「世界と契約?。」

エミヤ「簡単に言えば世界が滅んで仕舞う原因を始末する仕事をする奴の事を指す。」

子猫「世界が滅ぶ原因を始末ですか?。」

エミヤ「まあ都合のいい始末屋だな。」

朱乃「エミヤさん…今までどんな事をしてきたんですか?。」

エミヤ「何でもだ。ある時は一国の王を殺したり、戦場で争ってる国を見境なく殲滅したり、…:時には子供も手に掛けた。」

アーシア「そんな?。」

リアス「…:エミヤ貴方はソレを望んだの?。」

エミヤ「その問いに付いては断じて否だ!。…:世界と契約した時はこれで正義の味方になれたと思った。」

エミヤ「だが！そんなに現実には甘くなかった、世界にとって守護者は都合のいい駒だ！私は徐々に心が壊れていった。その内私は機械の様に殺しを重ねていった。」

リアス「そんな……。」

士郎「だから俺は悪魔として正義の味方になると決めた。」

朱乃「ですが正義の味方になれるのは人間だけでは無いんですか？。」

士郎「俺は悪魔にとつての正義の味方になります。現在悪魔ははぐれ悪魔がいます。」
リアス「はぐれ悪魔を討伐して正義の味方になるってことね。」

士郎「違います部長。」

リアス「どうゆう事かしら？。」

士郎「エミヤに聞きました、部長の様に眷属を家族として愛する上級悪魔は一部だけだ。」

一誠「本当ですか？部長。」

リアス「きやつ！イツセーいたの！」

一誠「はい、士郎が悪魔にとつての正義の味方になるっていった時に帰って来ました。」

リアス「そつそう。……確かにエミヤの言うとうりよ。」

一誠「エミヤ？部長エミヤは前にいますよ？。」

エミヤ「赤龍帝の少年、私の真名はエミヤ シロウ。 その衛宮 士郎の可能性の一つだ。」

一誠「はあー……えっ!!?。」

エミヤ「赤龍帝の少年よ落ち着け。」

一誠「エミヤ……さん? ありがとうございます、落ち着きました。」

エミヤ「一般的な上級悪魔は眷属を作る為にどんな手も使う。」

一誠「どんな手でもですか?。」

エミヤ「眷属にする奴の両親を殺したり、本人を殺してから眷属にしたり、無理矢理眷属にしたりとな。」

一誠「嘘だ! だって部長はそんな事しなかった!。」

リアス「イツセー……。」

一誠「部長はこんなどうしようもない変態の俺でも優しくしてくれた! アーシアだって学校に通える様にしてくれた! だから絶対にあり得ない! 幾ら英霊とはいえ部長を貶すなら俺はどんな奴でもぶっ飛ばす!。」

リアス「イツセー／／。」

一誠「今回のレーディングゲームだってあの種付け鳥から部長を守る為に俺は戦う! 部長は俺にとって一番大切な人だ!!。」

リアス「／＼／＼。」

渚「……………何この空気?。」

骸「一誠が部長に告白した。」

士郎「なんでさ!。」

木場「渚くんと骸ちゃん…いつ来たの?。」

渚「一誠が部長に告白した所から。」

アーシア「リアス部長いいな…私も渚さんに告白して欲しい。」

エミヤ「赤龍帝の少年…私は一般的な上級悪魔と言った筈だか。」

一誠「アツ。」

子猫「恥ずかしい勘違いと告白。」

一誠「やめてえ!子猫ちゃん俺のライフはもうゼロだから!。」

朱乃「あらあら私もクロちゃんに告白して貰いたいですわ。」

リアス「イツセー…………。」

一誠「部長!?此れはその?。」

リアス「私もイツセーの事が好きよ?。」

一誠「えっ!??。」

アーシア「渚さん前が見えません。」

渚「アーシアには、未だ早い。」

骸「むうーうーううー!。」

子猫「朱乃先輩目を隠すなら胸に埋める必要は無いです。」

木場「これは……見ない方がいいね。」

士郎「一誠おめでとう。」

エミヤ「なんでさ? 何故重苦しい話から甘酸っぱい青春の様な話になるんだ!……青春……彼女……うつ、頭が……?!?。」

何とリアスと一誠はキスをした、しかもデーパーキスだ。時間にして約1分くらい濃密で濃厚なキスを続けた二人。

一誠「ぶはあ、ぶっ部長!。」

リアス「ぶはあ、どうしたのイツセー?。」

一誠「えつとその……。」

リアス「イツセー? 私は初めてを捧げたのよ? イツセー男してどうゆう返しをしてくれるかしら?。」

一誠「ええいもうヤケだ!。」

リアス「ちよっ! イツセー?!?。」

今度はイツセーの方からキスをする、先程のキスより激しくそして濃密に。

一誠「ぷはあ……部長いや違う……リアス・グレモリーさん。」
リアス「ぷはあ……何かしら?。」

一誠「俺と……結婚を前提に付き合って下さい!。」

リアス「つ?!? ええ勿論此方こそよろしくね、イツセー。」

気が付けば一誠とリアス以外は誰もいなかった、一誠とリアスはそのまま一緒に部屋で寝た。

特に間違いはなかったと明記しておこう。 一誠はヘタレだった。

次の日

エミヤ「昨日の続きを話ていいかな?。」

リアス「ええ／＼早くしてちょうだい／＼。」

一誠「皆んな……もう弄るのはやめてくれえ。」

渚「だつてねえ。」ニヤニヤ

子猫「一緒に寝たんじゃよ?。」ニヤニヤ

木場「おめでどう、一誠くん。」ニヤニヤ

士郎「頑張れよ一誠、学園の連中にバレたら最悪殺されるぞ。」

骸「違うよ、良くて殺されて最悪この世の全ての悪に生贄にされると思うの。……朱

乃先輩いい加減離してください。」

朱乃「イヤですわ。離して欲しかったら告白して下さい。」

アーシア「部長さん！御幸せに。」

エミヤ「……勝手に話さして貰うぞ。昨日話した事以外にも悪魔は様々なことをしている。」

一誠「どんな事を？」

エミヤ「眷属を無理矢理犯したり、家族を盾に眷属した奴との約束を破ったり、人間を見下して気に入った奴を犯したり、希少妖怪を無理矢理眷属にしたり。」

一誠「信じられない。」

渚「具体例を挙げると、はぐれ悪魔の黒歌とかな。」

子猫「っ!? 渚先輩……それは本当ですか?。」

リアス「それこそ信じられないわ!。」

一誠「黒歌って奴はそんなに信じられないんですか? 部長。」

リアス「ええ勿論。だって黒歌は……。」

子猫「部長私が話します……はぐれ悪魔黒歌は私の……塔城 子猫の……いえ……妖怪猫又としての私……白音の姉です。」

子猫がそう言うのと頭から猫耳が生えお尻から尻尾が生えきた。

一誠「それは……本当か？子猫ちゃん。」

子猫「はい本当です。」

士郎「猫又……か……?!?まさか！渚！もしかして。」

渚「士郎ネタバレは厳禁だ。」

木場「士郎くんは何か分かったのかい？。」

士郎「大体は……な。」

子猫「姉様は仙術という力に溺れて主人を殺害しました。」

渚「それは悪魔が事実を捻じ曲げて作った真っ赤な嘘だ。」

朱乃「真っ赤な嘘？。」

リアス「なら！真実は！黒歌は幼い子猫を置いてにげたのよ！。」

渚「真実はこうだ……黒歌は悪魔になる時契約を持ちかけた、内容は「妹である白音を悪魔にしない代わりに自分が悪魔になる、だから白音を妹を絶対に悪魔にしないで。」って内容だ。」

はぐれ悪魔…黒歌の真実

渚「そうして悪魔になった黒歌は仙術よりメキメキと実力を発揮した、だが主人である悪魔はこう考えた「妹の方も眷属すれば自分は最も上にいける。」と主人は黒歌との契約を破り白音を無理矢理悪魔にしようとした、黒歌は主人に懇願した「契約を守って!。」とだが主人はこう言った「貴様も貴様の妹もそして他の眷属も、所詮私の道具なんだよ!。」と黒歌は泣き叫びながら主人詰め寄った結果主人は不運にも死んでしまった。」

木場「胸糞悪い話ですね。」

リアス「悪魔にとって契約は絶対のはずよ!。」

アーシア「なら何で黒歌さんが犯罪者にされるんですか?。」

渚「他の上級悪魔がもみ消したんだよ。」

朱乃「上級悪魔が契約を破れば下級悪魔に示しがつかないからですか。」

渚「朱乃先輩の言うとだ、もみ消した問題を全部黒歌に押し付けてはぐれ悪魔にした

…これが真実だ。」

士郎「やっぱり考えたとうりだ。」

子猫「なら姉様に…罪は無いんですか?。」

渚「黒歌に罪は無い、あるのは上級悪魔だ。」

リアス「信じられないわ…それが本当なら今すぐ魔王様に教えてはぐれ認定を取り消して貰わないと。」

木場「???…渚くん何でそんな事知ってるんだい?。」

アーシア「もしかして!。」

渚「黒歌なら大体三年前に助けてからずっと一緒に暮らしてるぞ?。」

子猫「姉様がお世話になってます。」

士郎「俺はこの様な事がなくせる様にしたいんです、ですから悪魔になっても俺はいんです。」

子猫「よかった…本当によかった。」

骸「子猫ちゃん泣きたかったら泣いて良いんだよ?。」

子猫は骸に抱きつき大声で泣いた、普段の無表情な子猫からは考えられない程に感情を爆発させた。骸は「大丈夫だよ、僕が付いてるからね?子猫ちゃん。」と子猫が泣き止むまでずっと耳元で言いながら頭と猫耳を撫で続けた。

骸「子猫ちゃんもう大丈夫?。」

子猫「は…はい／／。」

朱乃「羨ましい…羨ましい…羨ましい…ウラヤマシイ。」

木場「朱乃先輩が病んだ!。」

子猫「骸先輩／＼／その／＼／頭と猫耳を撫でるのをやめてくれますか? その…猫耳は敏感なので。」

骸「ヤダ、だつて可愛いもん。」

子猫「にやつ!。」

骸「ほれほれ、ついでに喉もナデナデ。」

子猫「にやく／＼／もつと撫でて下さい／＼／にやくん。」

朱乃「ウラヤマシイ…ウラヤマシイ…ウラヤマシイ。」

リアス「よし!これで士郎の眷属化が終わったわ…つて…朱乃が病んだ!そして子猫とクロがなんか良い感じだわ!。」

渚「仕方ない…クロよこれは自業自得だぞ…朱乃先輩此処にクロの女装写真があるんですけど? (メディアやアストルフオやアイリスフィールなどにより女装させられた。)」

朱乃「それは…本当ですか?。」

渚「ほれ。」

写真の内容

花嫁姿 メイド服とハイニーソ 旧スクール水着（女子用） 裸エプロン

手ブラジーンズ 全開パーカー バニーちゃん などなど。表情は赤面に

涙目。

朱乃「こつこれは！こんな素晴らしい写真を貰って良いんですか！」

渚「偶にクロの家族から写真が送られるんですよ、データごと。ですから家に帰

ればもつと凄いのがありますよ?。」

朱乃「是非私に譲って下さい!。」

アーシア「部長さん、士郎さんの駒は何ですか?。」

士郎「僧侶だよ、アーシアさん。」

一誠「木場と同じ剣を使うなら騎士でも良かったじゃん。」

リアス「イツセーの言うとうりよ? 士郎。」

士郎「エミヤにあんなの見せられたらどうしても僧侶が一番合ってるんですよ。」

リアス「何をみせられたのよ?。」

木場「固有結界ですよ、部長。」

リアス「なるほど……確かに僧侶が一番合ってるわね。」

一同はカオスな雰囲気のままレーティングゲームまでずっと修業を続けた。

レーティングゲーム開始～伝説の英雄現る

前回のあらすじ

一誠がリアスに対し盛大な告白をし、渚がはぐれ悪魔黒歌の真実を話した。

グレイファイア「後十分でレーティングゲームが始まります。」

リアス「分かったわグレイファイア。」

グレイファイア「それと渚様今回のレーティングゲームで変身出来る種類は一種類までとさせて頂きます、クロちゃんも同様に連れて行ける英霊は一騎までとさせて頂きます。」

リアス「ふざけないで！何でこっちがハンデを喰らわれないといけないの！。」

一誠「むしろハンデがいるのはライザーの方じゃないですか！。」

グレイファイア「それに付いては申し訳ありません、他の上級悪魔が人間の参加を認めない為にハンデをつけると煩かったのです。」

渚「別にハンデはいいが……部長今回のレーティングゲーム俺とクロだけで速攻終わらせる。」

リアス「ふざけないで！これは私とライザーのゲームよ！決着は私がつける！」
渚「なら部長はライザーに勝てる作戦や武器とか諸々あるのか？」

リアス「イツセーの赤龍帝の籠手があるわ！」

骸「赤龍帝の籠手だとライザーを殺すのは厳しいと思うよ？」

一誠「何でだ？骸ちゃん。」

骸「擬似的不死だとしてもライザーを殺せるまで、籠手で倍加できないと思う、てかさせてくれないと思う。」

木場「骸ちゃん？ライザーは本当の不死だよ？」

骸「この世に完璧な不死は存在しないんだよ？」

朱乃「完璧な不死が存在しない？どうゆうことですか？クロちゃん。」

骸「僕の家族の中に、万物の死を見れる目を持ったお姉ちゃんがいるんだ。」

子猫「万物の死……。」

アーシア「クロちゃんその目は神器ですか？」

骸「神器じゃ無いよ、分類上は魔眼だよ。」

士郎「魔眼……クロその魔眼の名称とかあるか？」

骸「あるよ、その魔眼の名称は直死の魔眼って呼ばれてるよ。」

リアス「直死の魔眼……。」

グレイファイア「どんな物を殺せるんですか?。」

骸「お姉ちゃん曰く、「生きてるなら、神様だつて殺してみせる」だつて。」

グレイファイア「神までも……。」

一誠「なら、渚はどうなんだ!ライザーを倒せる手段はあるのか!。」

渚「余裕であるは馬鹿。」

リアス「何を使うの?。」

渚「タキオン粒子。」

リアス 朱乃 グレイファイア「「え?」「」」

一誠 子猫 木場 アーシア 士郎「「「??」」「」」

リアス「もう一回言ってくれるかしら?。」

渚「タキオン粒子。」

朱乃「渚くん嘘は辞めて下さい。」

渚「だ・か・らタキオン粒子だつてんだろ!!。」

一誠「部長タキオン粒子ってなんですか?。」

リアス「タキオン粒子は常に超高速移動をしていて観測がとても難しい粒子の事よ。」

子猫「そんな粒子存在するんですか?。」

朱乃「それが分からないんです。」

木場「分からない?。」

リアス「ええ、そもそも観測が難しい過ぎて、存在してるかも分からないわ。」

渚「正確には、観測出来る時もあれば出来ない時もある。」

アーシア「タキオン粒子で何が出来るとは?。」

渚「その気になれば時間逆行とかも出来る。」

士郎「あり得ない時間逆行はあり得ない。」

渚「そんな士郎にこの言葉を授けよう、『あり得ないなんてあり得ない。』てな。」

渚「それに今回の修業で神器が進化したしな、クロ最初はコレを使え。」

渚は骸にガタツクゼクターを投げ渡した。

骸「突然ガタツクゼクター投げないでよ。」

グレイフィア「そろそろ始まります。」

渚「今回は俺らが暴れさせて貰うぜ。」

グレイフィア「この度のレーティングゲームの審判役を務めさせてもらいます、グレ

モリー家の使用人のグレイフィアです。」

グレイフィア「今回のレーティングゲームは魔王であるサーゼクス・ルシファー様も

ご覧になってます。」

リアス「そう…お兄様が見ていらっしやいのね。」

一誠「部長：お兄様って?。」

朱乃「サーゼクス様はリアスの実のお兄様なんですよ。」

士郎「それは本当ですか?。」

リアス「ええ本当よ。」

グレイファイア「レーティングゲームの会場に転移させて頂きます。」

アーシア「あれ?部室のままですよ?。」

グレイファイア「今回のレーティングゲームの会場は駒王学園をモデルに作った、使い

捨ての空間ですので好きな様に戦って下さい。」

士郎「悪魔の技術力は凄まじいですね。」

グレイファイア「それではレーティングゲーム開始です。」

渚「クロ!同時に変身するぞ。」

骸「了解!ナギ。」

渚 骸「変身!。」

カブトゼクター ガタツクゼクター「H E N S I N。」

渚「さらに!。」

渚 骸「キャストオフ。」

カブトゼクター ガタツクゼクター「C A S T O F F。」

骸「速攻で終わらせる！」

渚 骸「クロックアップ。」

カブトゼクター ガタツクゼクター「Clock Up。」

渚 骸「はあー!!。」

渚と骸はクロックアップを使用しライザー以外の眷属をリタイアさせた。

グレイフィア「……………は!!?ラツライザー眷属兵士八人、戦車二人、騎士二人、僧侶

二人、女王、リタイアです。」

ライザー「巫山戯るな!!こんな一瞬でやられる訳が無い!絶対に不正を働いたに違いない!。」

渚「馬鹿野郎、焼き鳥相手に不正なんてするか!。」

ライザー「貴様!フツハツハツハツやはり不正をしているでは無いか!。」

渚「どうゆう事だ?。」

ライザー「馬鹿な貴様に変わり俺が教えてやるよ!忘れたか今回のレーティングゲームで変身して良いのは一種類までぞ!。」

骸「残念だけど、クワガタの方は僕なんだよね。」

渚と骸は変身を解く。

ライザー「だが!変身を解いた今!不死であるこの俺を殺せる訳がないだろう?。」

渚「馬鹿だなお前。」

ライザー「なんだと！貴様下等種族の人間の癖に生意気だ！」

渚「残念だけどな、俺は人間では無くハンターだ！アカム爺。」

アカム爺「おっ！久々の出番か！任せろ小僧！」

骸「僕も人間じゃ無くて悪平等な人外だぜ？」

サーゼクスサイド

サーゼクス「彼等は今何と言ったんだい？グレイファイア。」

グレイファイア「ハンター、そして悪平等の人外と。」

サーゼクス「そんな……まさか……グレイファイア今すぐこのレーティングゲームを中

止させてくれ！」

グレイファイア「何故ですか？」

サーゼクス「彼等の言ってる事が本当なら……最悪ライザー君が死んでしまう。」

レーティングゲーム内

リアス「やっと追いついたわ。」

木場「彼等早すぎです。」

子猫「本当に瞬殺でしたね。」

士郎「タキオン粒子って凄いな。」

朱乃「変身しないで戦ってくれたらクロちゃんのカッコイイ姿が見れましたのに。」
アーシア「ハア：ハア：ハア：疲れました。」

ドライグ「相棒。」

一誠「どうした？ドライグ。」

ドライグ「相棒あの片目の奴をようやく見とけ。」

一誠「どうゆう事だ？。」

ドライグ「赤龍帝になった者は、白龍皇の他に倒さなければならぬ奴がいる。」

一誠「??。」

ドライグ「それが奴、ハンターだ。」

渚「久々にこの鎧を着たな。」

アカム爺「何千年振りだからのお。」

骸「僕も久しぶりだぜ！。」

ライザー「貴様等何者だ！。」

渚「何千年振りに自己紹介と行こうか、俺は爆炎を纏いし裁定者だ。」

骸「僕はただ平等なだけの悪平等な人外だぜ。」

ライザー「馬鹿な!!何故貴様等が伝説の英雄達の名を知っている!!。」

渚「英雄本人だからだよ。」

骸「さてライザー君、君の眷属は全員リタイアした、これから貴様が体験するのは圧倒的で慈悲の欠けらも無い虐殺だ。」

ライザー「まつ待て！これは悪魔の未来に必要な婚約だ！我々悪魔を救ってくれた英雄なら分かるだろ！」

骸「残念だけどあの時は悪魔為でも、墮天使でも、ましては天使為でも無い、アルトリアの為だ！」

骸「僕の神器の禁手の応用を見せてあげるよ、禁手 宝具真名解放祭り！」

骸「クラスバーサーカー指定、真名クー・フーリン・オルタ、宝具真名解放………全種解放………加減は無しだ。絶望に挑むがいい——噛み砕く死牙の獣！」

ライザー「ガァー!!。」

骸が放つ攻撃は紅海の怪物・海獣クリードの一撃、いくらフェニックスといえど耐えられるものではない。しかし骸は『大嘘憑き』でライザーの死をなかった事にする。

リアス「渚！ク口を止めて！早くしないとライザーが本当に死んでしまうわ！」

一誠「早く止めてくれ!!。」

アーシア「渚さん!!。」

渚「残念だが……無理だ。」

木場「何でなんだい？爆炎を纏いし裁定者なら出来るんじゃないか?。」

渚「確かに無茶をすれば止められるが……そしたらアレを食らう。」

子猫「アレ!??渚先輩アレって何ですか?。」

渚「クロの最強の能力であり最狂の力だ、あれは絶対に止められない。」

朱乃「それは…何ですか?。」

渚「嘗てクロがドライグの全力の炎をなかった事にした、『大嘘憑き』だ。」

士郎「『大嘘憑き』?。」

渚「………現実を虚構にする能力だ。」

士郎「馬鹿な!そんな能力あっていい物じゃ無い!。」

一誠「どうゆう事だ?。」

渚「クロは現在進行形でライザーが死んだ事実をなかった事にし続けている。」

リアス「そんな能力反則物よ!。」

渚「『大嘘憑き』で一番怖いのはなかった事にしたものやなかった事に出来ない、つまり取り返しのつかない能力なんだ。」

アーシア「限界はあるんですか?。」

渚「クロ曰く「因果律に係るものは全てなかった事に出来るよ!。」って言うて

た。」

朱乃「なら何故?クロちゃんはこんな処刑じみた真似をするんですか!。」

渚「多分…見せしめだと思う。」

子猫「見せしめ?。」

渚「クロは家族が大好きだ、だから悪魔に滅茶苦茶にされたく無いだろう。」

士郎「だからってここまでするか?。」

渚「クロは家族の為なら、何でもするさ。」

渚「これは、家族に手を出したら遠慮なくぶち殺すって意味が込められてる、……よく見とけあれがクロの力だ。」

骸「クラスライダー指定、真名オジマンディアス、宝具真名解放……全能の神よ、我が業見よ!そして平伏せよ……我が無限の光輝、太陽は此処に降臨せり!光輝の大複合神殿!。」

次に放つ攻撃は古代エジプトの王放つファラオの一人、オジマンディアスの一撃。これは神秘と魔力の塊で出来たピラミットをぶつけ合う一撃。

ライダー「もう辞めてくれ!。」

骸「クラスアベンジャー指定、真名巖窟王 エドモン・ダンテス、宝具真名解放……我が征くは恩讐の彼方…虎よ、煌々と燃え盛れ!。」

次に放つ攻撃は巖窟王 エドモン・ダンテスの一撃、時間停止に見える程の速度で動き疑似的な分身を起こし、恩讐の炎を打ち込む一撃。

ライザー「こ…殺してくれ。」

骸「クラスアサシン指定、真名山の翁、宝具真名解放…聴くがよい、晩鐘は汝の名を指し示した。告死の羽——首を断つか、告死天使！」

次に放つ攻撃は初代ハサン・サツバーハにして最後の山の翁の一撃、この一撃はただ首を断つだけの技だがこれを喰らって生きたものはいない。

ライザー「……………」

骸「クラスランサー指定、真名カルナ、宝具真名解放…神々の王の慈悲を知れ。絶滅とは是、この一刺。インドラよ、刮目しろ。焼き尽くせ、日輪よ、死に随え!!」

次に放つ攻撃は施しの英雄　カルナの一撃、神さえ殺す光の槍の一撃である。これを放つとゆう事は、一切の罪悪感も慈悲もない事を意味する。

ライザー「……………」

リアス「クロもう辞めて!!」

一誠「骸ちゃん!ライザーはもう戦えない!攻撃を辞めてくれ!」
木場「やり過ぎだ!」

アーシア「もう見てられません!」

子猫「お願いです、何時もの先輩に戻って下さい。」

朱乃「クロちゃん!もう終わったわ!だから戻ってきて!」

士郎「クロ!!モウヤメルンダ!。」

渚「無理だよ、あんなったクロは止められん。それと士郎ネタに走るな!。」

骸「クラスセイバー指定、真名アルトリア・ペンドラゴン、宝具真名解放……束ねるは星の息吹。輝ける命の奔流。受けるが良い!約束された勝利の剣!!。」

次に放つ攻撃は騎士王アルトリア・ペンドラゴンの一撃、約束された勝利の剣は人々のこうであつて欲しいという願いが、星の内部で結晶・精製された神造兵装であり、最強の幻想。聖剣というカテゴリーの中で頂点に位置する最強の聖剣。

木場「エクスカリバーだつて!!。」

渚「もしやクロの奴アーチャーにギルガメッシュをもつてくるつもりか!全員逃げろ!全てを生み出した原初の一撃が来る!。」

リアス「原初の一撃?。」

渚「考えてる暇があるなら走れ!あれはヤバイ!。」

一誠「どれぐらいヤバイ奴なんだ?。」

渚「見れば分かる!アレは見ただけで死が体験できるぞ!。」

骸「クラスアーチャー指定、真名ギルガメッシュ、宝具真名解放……原初を語る、天地は解れ無は開闢を言祝る、世界を裂くは我が乖離剣!星々を回す白、天上の地獄とは創世前夜の終着よ、死を以て静まるが良い天地乖離す開闢の星!。」

骸は無銘の剣、乖離剣エアを抜く。その一撃は世界を創る一撃、レーティングゲームの会場は崩れ去り様々な上級悪魔が顔をだす。

乖離剣エア　　剣と呼ぶには些か不恰な剣、しかしエアが出来たのは剣とゆう概念が生まれる前の事。　　刃は三つの円柱が連なる様に出ている。上から天、地上、冥界を示している、三つの円柱を違う方向に回し力を溜める、そうして放たれた一撃は、疑似的な時空断裂を引き起こす。

サーゼクス「ここまでとは………予想もして無かった。」

リアス「なによ!??今の一撃は！レーティングゲームの会場が崩れたわ!。」

ドライグ「あれは無限の神龍、オーフィスでも耐えられない一撃だ。」

渚「てかうロボロスがクロの前に来たら遠慮なくギルガメッシュと一緒に即エア抜くだろうな。」

一誠「なにその地獄。」

子猫「確か…ギルガメッシュは蛇に不死の秘薬を盗られたんですっけ?。」

木場「あつてるよ子猫ちゃん。」

士郎「なんだよ…あの剣…解析不能だ。」

朱乃「剣…なのでしょうか?。」

骸「グレイフィアさん早く、勝敗が決まったので終わりの宣言を。」

グレイフィア「畏まりました、今回のレーティングゲームの勝者はリアス・グレモリー様です。」

サーゼクス「待ってくれ、先程の一撃の詳細を教えてください。」

上級悪魔A「さつさと教える！そして俺様の眷属になれ！」

骸「もう無理……魔力使い過ぎた……眠い……。」

ギル「なら私の腕の中で寝とけ、今宵は気分が良い特に許す。」

上級悪魔A「さつさと説明して俺様の眷属になりやがれ!!人間如きが俺様の眷属になれるんだ光栄に思え!!。」

サーゼクス「やめろ!!彼を無闇に刺激するな!。」

ギル「もう遅い、王の財宝……その蝙蝠の雑種、私の妻にその様な口ぶり万死値する!。」

ギルガメッシュは黄金の波紋を、上級悪魔Aに対して二十は出現させて宝剣や聖剣を射出する。

ギル「蝙蝠の雑種風情が我が妻を醜い蝙蝠の化け物に変えようとしおつて……ここにいる蝙蝠の雑種供を皆殺しにした方が妻の為になる気がするな。」

サーゼクス「待ってくれ!其れだけは勘弁願いたい!。」

ギル「黙れ!ソロモンの七十二の魔神の名を汚している偽りのグレモリーめ!。」

サーゼクス「何を言っているんだ？私は本物のグレモリーだ。???」
「私は貴様らの様な悪魔を創った覚えはないぞ？」

ギル「来たな魔術王、後は任せた我は妻と家に戻っているぞ。」

ソロモン「心得た、英雄王よ。」

リアス「彼は誰なの？彼が出て来た瞬間から震えが止まらわ。」

ドライグ「奴は……まさか！ソロモンか！」

ソロモン「当たり前だ赤い蜥蜴よ、我が名はソロモン！魔術王にしてソロモンの七十二の魔神を創り出したものである！」

上級悪B「巫山戯るのも大概にしる人間！貴様が我々悪魔を創り出しただと？笑わせるな。」

ソロモン「煩い出来損ないだ、弾けよ。」

ソロモンが命令を下すと上級悪魔が弾け飛んだ。

サーゼクス「まさか……本当にソロモンなのか？」

ソロモン「何度も言っているだろう、さて俺が出て来た理由は俺の愛弟子にちよつかいを出そうとした愚か者がいたからだ。今度愛弟子にちよつかいを出そうとしてみる、本物の魔神を冥界に解き放つ。」

ソロモンはそれだけを伝えると骸の元に転移した。

渚「サーゼクス：一樣忠告だけはしといてやる、骸の家族や友人に何かしてみろ……多分冥界が消し飛ぶぞ。」

サーゼクス「ああ分かっているさ、魔王権限を使って禁止にさせるさ……だけどまさか男だったなんて。」

渚「クロに性別は関係無いぞ?。」

サーゼクス「如何してだい?。」

渚「英雄王　ギルガメツシユの財には性別をいじる霊薬なんか腐る程のある。」

サーゼクス「それは良かったよ。」

グレイフィア「渚様少しよろしいでしょうか?。」

渚「なんでも聞いて良いぞ。」

グレイフィア「では、もしクロちゃんを敵に回したら誰が出て来ますか?。」

渚「騎士王、征服王、影の国の女王、美の女神、天の鎖、ヘラの栄光、旗振りの聖処女、円卓の騎士、人王、魔術王、英雄王、これぐらい出せば敵に回したらいけないのが馬鹿でも分かるだろ。」

サーゼクス「グレイフィア……他の魔王に連絡して絶対に彼等を敵にしない様に対策を講じるぞ。」

骸はやはり英霊達に愛されている、もし冥界が滅んでしまうならそれは悪魔の自業自

得である。

渚「簡単だよそんなん、クロの家族に手を出さなきゃ良いんだよ。」

サーゼクス「それが出来たら苦勞はしないよ。」

こうしてライザーとのレーティングゲームは幕を閉じた。被害はライザー・フェニックス、上級悪魔二人、レーティングゲームの会場だけだが、爆炎を纏し裁定者と悪平等の人外が復活したのは三大勢力に大打撃を与えた。

伝説の英雄と生徒会

前回のあらすじ

ライザーとのレーティングゲームで自分達の正体を明かした渚と骸。骸は家族を守る為にライザーを生贄して宝具真名解放祭りを披露した。

リアス「お兄様少しお話が。」

サーゼクス「何だい？リアス。」

リアス「はぐれ悪魔黒歌についてです。」

サーゼクス「黒歌がどうかしたのかい？。」

リアス「黒歌の主が黒歌との契約を破り、それを知った他の上級悪魔が事実を隠蔽し黒歌に濡れ衣を着せた事実が出て来ました。」

サーゼクス「……リアスそれは誰からの情報なんだ？。」

リアス「渚に、爆炎を纏し裁定者に聞きました。」

サーゼクス「爆炎を纏し裁定者様、それは本当ですか？。」

渚「本当だ……、それと俺の事は渚またはハンターと呼んでくれ、クロのこともクロ

か安心院さんと呼んでやってくれ。」

サーゼクス「分かりましたハンター様と呼ばせてもらいます、そして黒歌の事は此方で調べてからはぐれ認定の解除をさせて貰います。」

渚「いや、今すぐ解除して貰うぞ。」

サーゼクス「ですが、その事実が本当か調べる必要がありますので。」

渚「馬鹿かお前？ 上級悪魔がそう簡単にバレる様な隠蔽工作をする訳ないだろ。」

子猫「どうすれば姉様の無実を証明出来るんですか！」

渚「時を遡ればいい。」

子猫「え？」

突然響く電車の汽笛、空に浮かぶ謎の空間から電車が来た。

サーゼクス「ハンター様、この電車は？」

渚「時を超える電車　デンライナーだ、これで黒歌がはぐれ認定を受ける原因になった時代に飛べばいい。」

リアス「渚……やっぱり貴方もクロと同じくらい理不尽だわ。」

渚「失礼な、こんなのクロに比べたらまだまだ常識的だ。」

一誠「ヤバイ、物凄く気になる。」

アーシア「渚さん！クロちゃんはどんな事が出来るんですか？。」

木場「ダメだ！アーシアさんそれは聞いてはいけない事だ。」

子猫「触らぬ神に何とやらですか。」

渚「擬似的な時空断裂、固有結界、因果律の擬似的操作、直死の魔眼、神を律する鎖、星の聖剣、などなどだな。」

朱乃「やっぱリクロちゃんは凄いですね。」

渚「そんなの置いといてさっさとデンライナーに乗れ、黒歌の無実を証明しに行くぞ。」

一誠「いきなり過ぎないか?。」

渚「サーゼクス……お前に拒否権ねえから!。」

サーゼクス「分かっています……因みもし拒否したら如何なつてましたか?。」

渚「クロを呼んで、対界宝具ブツパ。」

サーゼクス「さあ！行きましょうか!。」

リアス「皆んな！早くデンライナーに乗るわよ!。」

一誠「はい！部長。」

朱乃「クロちゃんに会えるなら別に良いのだけれど。」

士郎「またあの一撃と同じ物が飛んで来るとか……。」

木場「士郎くん、僕もあの一撃はもうお腹いっぱいだよ。」

子猫 「私はもうイヤですよ、……後で骸先輩に責任取って貰いましょう。」
 朱乃 「子猫ちゃん？責任って何ですか？」

子猫 「責任は責任です、具体的には毎日撫で撫でしてもらうか、結婚です。」
 朱乃 「許しませんよ？クロちゃんと結婚するのは私ですから。」

朱乃 「ふふふ。」

子猫 「シャアアア！」

渚 「二人とも先ずは、クロの家族もといサーヴァント達が相手だぞ。」

朱乃 子猫 「うっ？！忘れてました。」

渚 「デンライナーに乗れ二人共、特に子猫お前は客が会いたがってる。」

子猫 「客？」

渚 「さて全員乗ったか？乗ったならデンライナーにいる奴らを紹介しよう。」

「おい渚！早く紹介しろ！」

「此れは此れは、可愛いお嬢さん達僕とお茶しない？」

「zzzz……。」

「あはははは！新しいお客さんだ！」

「また私の罪が増えてしまうな。」

「沢山のお客が来たな！皆さん先ずは飴をどうぞ。」

??? 「皆様お茶をご用意しました、どうぞご自由に席にお座りください。」

リアス 「……………渚説明してちょうだい。」

サーゼクス 「わざわざお茶をありがとうございます、では戴きます……………これは美味しい。」

一誠 「なんか一人？寝てるんだけど…。」

子猫 「この飴美味しいです。」

士郎 「確かに子猫の言うとうりだ、だがこんなの飴見たこと無いぞ。」

??? 「はっはっ！その飴は私のお手製だ。」

朱乃 「お茶のお誘いは嬉しいですけど、私にはクロちゃんがいるのでお断りします。」

アーシア 「色んな人？が居ますね？。」

木場 「一誠くんしかツツコミしてくれない。」

渚 「こいつらはイマジンって言う怪人だ。」

サーゼクス 「怪人…危険では無いんですか？。」

渚 「一般的なイマジンは危険だがこいつらは俺と契約してるから大丈夫だ。」

リアス 「契約？使い魔かしら？。」

渚 「イマジンは人間と契約しないと肉体を得ないんだ。」

士郎 「契約してない状態だとどんな形してるんだ？。」

渚「砂で出来てる。」

アーシア「砂ですか。」

渚「それよりこいつらの紹介をさせて貰うぞ。」

渚「この赤い鬼がモモタロス、青いのがウラタロス、黄色がキンタロス、紫がリュウタロス、白い鳥がジーク、飴を配った奴がデネブ、最後に青い鬼がテディだ。」

モモタロス「俺様の名前はモモタロスだ！」

ウラタロス「僕の名前はウラタロスさ。」

キンタロス「zzz……。」

渚「起きろキンタロス！」

ガアン！

キンタロス「おっ！いやーすまんな寝てしもうたわ！俺の名前はキンタロスだ！」

リュウタロス「じゃー次は僕だね！僕はリュウタロスだよ！」

ジーク「私はジークだ。」

デネブ「私はデネブだ！皆さん渚をよろしくな。」

テディ「皆様私はテディと申します。」

渚「それと……子猫に客だ。」

???「白音……。」

子猫「この声は！黒歌姉様！」

黒歌「白音！」

子猫「姉様！」

渚「俺とサーゼクスとイマジン達は前の列車で黒歌のはぐれ解除の確認をしてくる。」

黒歌「白音……ごめんねお姉ちゃん……白音の事守れなかった。」

子猫「大丈夫です……黒歌姉様……また会えただけで嬉しいです。」

リアス「良かったわね、子猫。」

一誠「ぼんどうによがっだ！」

木場「イツセーくん泣きすぎだよ。」

アーシア「ううう……本当に良かったです。」

朱乃「良かったですわね、子猫ちゃん。」

サーゼクス「黒歌さん。」

黒歌「何ですかにや？」

サーゼクス「悪魔を代表して謝罪します、この度は上級悪魔のくだらない意地で貴女を犯罪者にしてしまった事を深くお詫びします。」

子猫「そしたら！」

サーゼクス「はい黒歌さん、本日をもって貴女のはぐれ認定を解除させていただきます」

す。」

黒歌「やつ……やったー!!。」

子猫「良かったです、黒歌姉様。」

リアス「黒歌はこれからどうするの?。」

黒歌「渚の家に居るにや。」

リアス「そうじゃ無くて、これから悪魔としてどうするかよ!。」

黒歌「渚にハンター様の眷属になるにや。」

渚「別に俺は良いんだが、サーゼクス悪魔じゃねえ俺が眷属を持つていいのか?。」

サーゼクス「大丈夫です、そこは魔王達で如何にかしますので。」

渚「おk、把握。」

リアス「したら明日から駒王学園に通って貰う事にしましょう、学年は私と同じ三年で良いでしょう。」

渚「なら全員家に送って行ってやるよ。」

次の日 放課後部室

???「リアス、眷属紹介に来ました。」

リアス「ええ、入ってちょうだいソーナ。」

ソーナ「失礼します。」

一誠「何で生徒会会長が此処に?。」

???「リアス様此奴にまだ説明してないんですか?てか何で下等種族の人間が此奴に居るんだよ。」

ソーナ「匙!口の利き方に気を付けなさい!此処にいらつしやるのはあの伝説の英雄様なんですから!。」

リアス「匙といったかしら?。」

匙「はい!シトリー眷属の兵士です!。」

リアス「あの二人に関しては気を付けなさい、下手したら貴女の責任で冥界が滅ぶかも知れないから。」

匙「え。」

木場「これが嘘じゃ無いのが理不尽だよね。」

匙「え?。」

子猫「因み渚先輩が爆炎を纏いし裁定者で、骸先輩が悪平等な人外です。」

匙「……………」

一誠「匙……………」

匙「ひ…兵藤…嘘だよな…あのイケメン渚と我らがアイドルの骸ちゃんが英雄だなんて夢だよな?。」

一誠「ところがどっこい……夢じゃありません……現実です！これが現実！」

士郎「因みフェニックスを倒したのは、彼処で朱乃先輩とグレイフィアさんに愛でられてるクロだ。」

匙「ふあ！」

朱乃「グレイフィアさん！クロちゃんを返して下さい！」

グレイフィア「お断りします、クロちゃんは誰のものでも無いので私が愛でも問題ありません。」

骸「むぐーううう！」

グレイフィア「あっ／＼／＼そんな所ダメですよ／＼／＼クロちゃん。」

朱乃「ぐぬぬぬ！クロちゃん！私ならもっと凄い事だつてヤラシてあげるわ！」

匙「ガアー！羨ましいぞ！あれ！」

渚「なあ黒歌？離れてくれないか？アーシアがさつきからずっと頬を膨らましてんだけど。」

アーシア「むうー！」

黒歌「何にや？不満かにや？」

渚「いや別に？頬を膨らましたアーシア可愛いし。」

アーシア「はうう／＼／＼渚さんに可愛いって言つて貰った。」

黒歌「羨ましいにや!!ならばこつちも手段は選べないにや!。」

渚「おっおい!黒歌!身体を押し付けるな!むっ胸が背中に!。」

匙「ガアーーーーー!!!。」

士郎「匙が壊れた!!。」

一誠「この人でなし!!!。」

黒歌「人じゃ無いにや、悪魔にや。」

部室内混沌中

リアス「ええーと……さっきのは無かった事にして。」

骸「え!?無かった事!?。」

渚「クロ落ち着け、『大嘘憑き』の定番じゃ無いから。」

骸「ハーーイ。」

ソーナ「私達が此処に来た理由は、お互いの眷属を紹介しに来ました。」

一誠「生徒会は悪魔の集まりだった……だと!。」

匙「何だよ、兵藤お前知らなかったのかよ。」

一誠「悪魔になってから此処最近、驚く事ばかりで気にして無かった。」

匙「はっ!どうせどうやって覗きをするかで忙しかったんだろ?。」

一誠「……………骸ちゃんの花嫁姿。」

匙「何?。」

一誠「墮天使を秒殺するカメンライダーと花嫁姿の骸ちゃん、初めて参加するレーティングゲームの為の修行で判明する仲間が将来英霊になる事実、上級悪魔の実態、レーティングゲーム開始からもの十数秒で壊滅するライザー眷属、渚と骸ちゃんが英雄と判明した事、骸ちゃんが神器の禁手でライザーを虐殺していく風景、そして判明する骸ちゃんの反則的能力e t c.。」

一誠「此れでも鼻で笑わせるか? 匙くん?」

匙「悪かった! 俺が悪かったから! 目に! ハイライトを戻してくれ!。」

リアス「……さてソーナ眷属紹介といきましようか!。」

士郎「この度、リアス・グレモリー眷属の僧侶に転生しました衛宮 士郎です。」

一誠「同じくリアス・グレモリー眷属の兵士に転生しました兵藤 一誠です。」

渚「破壊者の神帯の所持者にして、爆炎を纏いし裁定者だ気軽にハンターとでも呼んでくれ。」

アーシア「アーシア・アルジェントです! 聖母の微笑みを持っています!。」

黒歌「渚の眷属で僧侶してるにや、黒歌にや。」

骸「英霊達の主人の所持者で悪平等なだけの人外さ! 親しみを込めて安心院さんと呼びなさい。」

グレイフィア「魔王ルシファー様の命令によりクロちゃんの眷属になりました、駒は僧侶です。」

ソーナ リアス「……………え?。」

リアス「ちよつ!ちよつとグレイフィア!私そんなの聞いてないわよ!。」
グレイフィア「言ってますせんもの。」

ソーナ「取り敢えず匙自己紹介しなさい。」

匙「アツハイ、ソーナ・シトリー眷属の兵士に転生しました匙 元士郎です。」

一誠「部長何で今になってから眷属紹介をするんですか?。」

リアス「それは今の貴方達に使い魔を持って貰う為よ。」

士郎「使い魔……………サーヴァント……………腹ペコ、うつ、頭が……………!?。」

アーシア「士郎さん今治しますね。」

渚「使い魔取りに行くのに顔合わせが必要なのか?。」

ソーナ「彼は1カ月に一回しか依頼を受けてくれません。」

骸「部長は使い魔持ってるんですか?。」

リアス「勿論持ってるわ、私は蝙蝠よ。」

朱乃「私は小鬼です。」

木場「僕は鳥さ。」

子猫「私は白猫です。」

渚「使い魔か……俺も欲しいな。」

骸「僕は良いかな?。」

朱乃「あら?クロちゃんは要りませんか?。」

骸「サーヴァント達が居るし。」

匙「サーヴァント?。」

骸「そつサーヴァント、僕の愛すべき家族達だよ。」

???「みこーん!謂れは無くとも即参上、軒轅陵墓から、良妻狐がやって来ましたよ

!ご主人様!。」

???「済みません我が主よ、この女狐の動きを止めませんでした。」

テンプレ化して来たが気にしない

突然出て来たのは、ピンク色の髪で頭に狐耳を生やし、腰から狐の尻尾を生やした青
い着物を来た露出強(誤字にあらず)の女性と顔を白い骸骨の仮面で隠し全身黒タイツ
で右手が異常に発達した男性。

骸「やめて!抱き着かないで!死にたく無いよ!。」

???「ご主人様♪さつきまで底の何処の馬の骨とも知れぬ輩とイチヤイチャしてやがり
ましたよね〜?だ・か・ら♪今日という今日は私のテクで骨抜きにしてあげます。」

骸「イヤアー！！」

呪腕「ええーこんな時に何ですけど、自己紹介させていただきます…私は山の翁の一人ハサン・バツサーハの呪腕のハサンです以後お見知り置きお。」

玉藻「私は玉藻の前と申します、ご主人様に仕える良妻で御座います。」

骸「えへへへ玉藻もつと撫で撫でて〜。」

グレイフィア「この心の底から湧くどす黒い感情は何でしょうか？物凄くあの女狐をコロシタイ。」

朱乃「ウフフ…フフフ…。」

子猫「ピンクは淫乱です、骸先輩私の所に来て下さい。」

ソーナ「玉藻の前！ハサン・バツサーハ！あり得ないわ！どっちも既に死んでる筈よ！！」

匙「ならこの二人は死人なんですか!?!?。」

リアス「違うわよソーナ。」

ソーナ「リアス…説明して下さい。」

リアス「この二人もサーヴァント、つまり英霊よ。」

ソーナ「だから！サーヴァントとは何かを説明して下さい!！」

呪腕「其れなら私が説明致します、英霊とはその者の行ってきた事やその者自身の生

き方が死後に伝説又はその後の世界まで語り継がれた者が、世界に認められて座と呼ばれる場所に行きます。」

匙「ならあんたは、どんな伝説を遺したんだよ。」

呪腕「私と言うより、私達が遺した伝説は暗殺者の語源になりました。」

匙「私達?。」

ソーナ「彼等は11世紀から13世紀半ばまで、イランからシリア全土の山岳地帯を拠点とする人類史初の暗殺教団ですよ。」

呪腕「御説明感謝致しますお嬢さん、私は19いるハサンの内の一人呪腕のハサンで御座います。」

一誠「彼方の女性は?。」

呪腕「あの女狐は九尾の狐ですが、天照大御神が人間を知りたいと思い自分の力を落として人間界に解き放ったのがあの女狐です。」

木場「イツセーくん僕、この歳でもう耳がイカれて幻聴が聞こえちゃったよ。」

一誠「大丈夫だ、木場俺もちゃん聞こえたから、匙はどうだ!。」

匙「……………」

士郎「気をしっかり持ってお前達!この程度で現実逃避してたらこの先生きていけないぞ!。」

呪腕「はて？ 私何か致しましたか？。」

渚「大丈夫だ、呪腕こいつらが理解したく無い現実突き当たったから、現実逃避してるだけだ。」

黒歌「渚？ この骸骨が行った事本当にや？。」

渚「事実さ。」

黒歌「あれが天照大御神様……………」

アーシア「渚さん！ 天照大御神さんって誰ですか？。」

渚「日本の神様で、太陽が神格化した女神様、日本神道における神々の世界、高天原の最高神だよ。」

アーシア「……………えええー！。」

リアス「クロロ！ 早く正気に戻って！」

骸「えへへへ……………あつ／＼／／。」

朱乃「クロロちゃん！ 正気に戻ったのね！ さあ！ 私の胸に飛び込んで来て！」

グレイフィア「クロロちゃん？ 私の胸に来て？ 沢山愛してあげるから。」

子猫「骸先輩？ この前のレーティングゲームで私、トラウマが出来ましたので責任を取って私と結婚して下さい。」

玉藻「はっ！ 小娘共が笑わせるな！ ご主人様の妻はこの私！ 良妻サーヴァント玉藻

ちゃんなんですよ?。」

リアス「クロ!今すぐ!その四人を止めて!部長として命令しますどんな手を使っても良いから!。」

骸「どんな手でも良い?………良し!ジャック直伝の必殺!。」

渚「ジャック!おい其れはやり過ぎだ!ジャックの宝具は辞める!。」

骸「クエスチョン?あなたたちの誰かが、私達のおかあさん?。」

ジャック・ザ・リッパーの服装で幼い子供の特長のつたない口調で

朱乃 グレイフィア 子猫 玉藻 「二」………ぶっは!!。二二

骸「これぞ!ジャック直伝!萌え殺し挨拶だ!。」

リアス ソーナ 「ゴ」褒美に頭、撫で撫でしてあげる。二

ナデナデ

骸「ふみゆー。」

一誠「匙?あの姿を、見て何かを思わないか?。」

一誠「因み俺は、自分がどれだけ汚れてるか嫌という程思った。」

木場「僕は、世界の真理を知った気がするんだ……可愛いはあらゆる世界でも正義なんだって。」

士郎「俺は木場と同じで、クロのお陰で絶対不変の正義が可愛いって知れたよ。」

匙「……………ああ何か…自分がどれだけ汚れてるか分かったわ。」

アーシア「可愛いですう。」

黒歌「あれで男つてのが信じられないにや。」

渚「因みあれ、殆ど素でやってるからな？中学の文化祭でどれだけの変態紳士と変態淑女が生まれた事やら。」

呪腕「あの挨拶は、同じアサシンクラスとしてこう…なんて言えば良いのでしょうか？納得いきませんな。」

リアス「それはそうとクロ？サーヴァント達以外で使い魔いる？」

骸「いるけど……………」

リアス「なら呼んでくれるかしら？」

骸「別にいいけど……………どうなっても知らないよ？来て！アーカード！」

リアス「え？」

アーカード「私に何の用だ？我が主よ？」

骸「彼が僕の唯一の使い魔、アーカードだよ？」

ソーナ「因み…種族は？」

骸「吸血鬼だけ？」

アーカード「そんな事はどうでもいい、其処の小僧。」

匙「……………えっ？俺？。」

アーカード「そうだ、貴様だ小僧。」

渚「……………あつ（察し）。」

黒歌「???どうしたにや？いきなりこれから起こる出来事を全部分かった、みたいな顔して?。」

アーシア「渚さん！吸血鬼です！血吸われちゃいます！」

アーカード「貴様は私の主を下等種族と呼んだ、お前此処から生きて帰れると思うなよ？ぶち殺すぞ悪魔。」

匙に突きつけられる白と黒の拳銃と呼ぶにはデカすぎる獲物。

骸「stopだ、アーカード僕は気にしない。」

アーカード「了解した、我が主よ。」

骸「だから呼びたく無いんだよ？確かに忠誠が有るのは良いけどやり過ぎだよ。」

リアス「彼は何者なの?。」

渚「最強のアンデット、不死者、死なずの君etc etc、アーカードの呼び方は沢山ある。」

ソーナ「確かに忠誠があるのは良いけど、相手を選ぶべきだと私は思います。」

骸「アーカードは此れでも拘束術式で、力を抑えてるよ?。」

一誠「……………全力出したらどうなる?。」

骸「冥界が滅ぶ。」

木場「もう驚けない。」

士郎「使い魔が使い魔して無い。」

ソーナ「……………リアス! 匙の事お願いしますよ?。」

匙「ちよつ! 会長!。」

ソーナ「済みません匙、私はもうこの空間に居たくありません。」

匙「会長くっ!??。」

ソーナは渚と骸の理不尽さに耐えきれず部室から逃げ出した。

リアス「匙も一緒に使い魔の森に行きましょう?。」

匙「はい。」

リアス達は渚と骸を連れて使い魔の森に転移した、此れが二人の理不尽さが加速するのをリアス達はまだ知らない。

使い魔編

リアス「転移完了つと、ここが使い魔の森よ」

??? 「ゲットだぜい」

匙、イツセー「!?!」

渚「なあ、クロ」

骸「(何、ナギ?)」

渚「(どう見ても…あいつ、サ○シをおっさん化したようにしか見えないんだけど)」

骸「(確かにw)」

ザトウジ「俺はザトウジ、使い魔マスターだ!! (つて爆炎を纏いし裁定者《フレ
イム・ルーラー》と悪平等《ノットイコール》な人外がいんるだけど?!)」

二人の英雄の存在に驚いていたザトウジであつた…

リアス「イツセー、匙君、挨拶しなさい」

イツセー「グレモリー眷属のポーン兵藤一誠です」

匙「シトリー眷属のポーンの匙元士郎です」

そして、イツセー達は使い魔をゲットすべく使い魔の森を歩いた…

イツセー「ウンディーネがあんなにゴリゴリのマッチョだったとは」
匙「ああ、イメージと全然違かった」

ザトウージ「赤龍帝がいるなら… ティアマットがおすすすめだな」
イツセー「？」

ザトウージ「この森で最強のドラゴンだな」

渚「?!」

《ドライバーオン》

《シャバドウビタッチヘンシーンシャバドウビタッチヘンシーン》

《フレイム》

《ヒーヒーヒーヒー》

《ルータッチマジックタッチゴー》

《レポート、プリーズ》

リアス「えっ…渚?!」

骸「あっ（察し）」

子猫「骸先輩、何で何かを察したような顔しているんですか？」

骸「うん、ナギのとある“血”が騒いんだなあ」

子猫「とある…“血”。ああ、あれですか！」

くその頃…渚はく

やあ、伝説の英雄…爆炎を纏いし裁定者《フレイム・ルーラー》こと結月渚だ。今現在…ティアマットのいる洞窟の中に来たぜ。

??? 「誰だ…貴様は」

渚（ウィザード）「んっ？」

??? 「(なっ!!このオーラは!?)」

渚（ウィザード）「お前がティアマットか？」

ティア「(いかにも私がティアマットでございます。爆炎を纏いし裁定者《フレイム・ルーラー》様…どういったご用でしょうか?)」

渚（ウィザード）「お前を俺の使い魔にしたいと思つてな…いいか？」

ティア「(はい!!!全力で務めさせて頂きます!!)」

渚（ウィザード）「そうか…よろしくなティアマット」

ティア「(ティアマットでは長いのでティアとお呼びください)」

渚（ウィザード）「分かった…ティア、悪いんだが俺が居るのは人間界なんだ、姿を変えてくれないか？」

ティア「(分かりました)」

すると、ティアマットの体が光りだしと思つたらそこには和服の女性が立っていた。ティア「これでよろしいでしょうか？」

渚（ウイザード）「OKだ、じゃあ俺に捕まってくれ仲間のとこまで転移する」

ティア「分かりました：爆炎を纏いし裁定者様！」

渚（ウイザード）「そうそう、俺のことは渚でいいぜ」

ティア「はい！分かりました：渚様」

《ルータッチマジックタッチゴールータッチマジックタッチゴ》

《レポート、プリーズ》

くその頃、イツセー達はく

ザトウージ「おつ、あの木の上に居るのは蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）の子供だな珍しいぞ！」

蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）「く、く、く、きゅ〜」

アジア「ふふつ、くすぐったいです」

ザトウージ「金髪のお嬢ちゃん、蒼雷龍（スプライト・ドラゴン）に気に入られてるな」

アジア「この子にします！」

リアス「なら、名前を付けてあげなさい」

アーシア「はい！ツツキーです！」

アーシア、骸以外「？」

アーシア「えつと…渚さんの苗字の結月の間のづを小さいつに変えて、ツツキーです
!!」

アーシア、骸以外「ああ〜」

渚「ふい〜」

骸「あつ、ナギが戻ってきた」

渚「あつて何だよ…クロ」

??? 『この気配…娘だ(だわ)』

全員 「うわっ」「」

渚「はあ、レイアとレウスどうしたんだ？」

レウス「俺とレイアの娘の気配がしたんだが…」

渚「マジかよ?!」

??? 「(´▽`)/ きゅ〜」

赤と緑が混ざったドラゴンが現れた

レイア「あっ！レイス!!」

ボンツという音とともに赤と緑のドレスを着た女の子が現れレウスとレイヤの元に走りだした。

レイス「パパママママ」スタツ

リオ夫婦、娘「ニ(っ) >w<() w<() ギュツ♥」

そう、リオ夫婦の娘のレイスである

リオ夫婦、娘以外「癒される」

レウス「レイス…まだお前は火龍としては未熟だろう」

レイヤ「そうね…誰かの使い魔になったら一人前の火龍になれると言ったはずよ」

レイス「えーと…私はこの寝癡頭の使い魔になりたいと思っただよ！」

リオ夫婦、レイス、イツセー以外が

イツセーの方に目を向ける

イツセー「えっ（寝癡じゃなくてくせっ毛なんだけど…）」

レイス「という訳で寝癡頭さんよろしく」

寝癡頭「よろしく…レイス、あと俺のことはイツセーでいいよ（つて表示!!）」

レウス「娘のことは任せたぞ…イツセー!!」

イツセー「は、はい!!」

レイヤ「えっと、匙君だっけ？」

匙「はい、そうですが？」

レイヤ「あなたの後ろ…」

???「グルウウ」

匙「えっ（カチーン）」

サジの後ろに禍々しい色の龍がいた

ボンッ

???「やつほー、渚！」

渚「よっ、イル！」

彼女の名前はイル、爆食龍イビルジョーである。

レイス「あつ、イルお姉ちゃん!!」

渚「で、イルどうしたんだ？」

イル「えつとね〜沙〇・クロ〇ロード君?の使い魔になろうかなと思いまして〜」

匙「誰が、ソレ〇タルビーイ〇グを名乗る三兄妹に恋人を殺されかけた学生だ!!俺は匙現士郎だよ!!」

イル「ごめんごめんw w w渚からガ〇ダ〇〇〇の全シリーズを貸して貰って見たからサジって聞くとね？」

匙「ね?じゃねーよ!!」

イル「まあまあ、つーことでよろしくね〜匙君！」
こうして、イツセーとサジは使い魔を
無事ゲットできたのであった：